

# 玉 沢 地 区 条 里 跡

## 第15次発掘調査報告

～市玉沢線道路建設に伴う発掘調査報告書～

2007年 3月

大分市教育委員会



調査地遠景

## 序 文

本書は、平成17年度に都市計画道路市玉沢線道路建設に伴い実施いたしました玉沢地区条里跡第15次調査の成果を収録したものであります。

玉沢地区条里跡は、古代の条里状の地割りを現在に残す水田跡が広範に存在する地域として周知されてきました。近年の発掘調査成果では、弥生時代に始まるこの地域における水田の成立とその変遷が解明されつつあります。

今回の調査により、度重なる七瀬川の氾濫によって形成された微高地上に営まれた様々な時期や形の住居群、さらに微高地の北側と南側とで様相を異にする低湿地の水田とその変遷等が確認されました。

このことは、弥生時代の雄城台遺跡、古墳時代の木の上古墳群、古代から中世にかけての高瀬石仏等の成立と、それを支えた集落及び水田との関連を考える上で重要な成果となりました。

つきましては本書が学術研究に寄与するとともに、文化財保護思想の高揚に一助となれば幸甚に存じます。

最後になりますが、調査から報告書刊行にあたり多大なるご配慮・ご協力を賜りました大分市都市計画部街路建設課、植田新都心中央土地地区画整理組合、梅林建設株式会社ならびに関係各位に対しまして心から感謝申し上げますとともに、ご指導いただきました諸先生方に深くお礼申し上げます。

平成19年3月

大分市教育委員会

教育長 秦 政博

## 例 言

1. 本書は平成17年度、大分市大字市字大坪1番1号外18筆において実施した市玉沢線道路建設に伴う玉沢地区条里跡第15次の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は大分市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、平成17年9月1日～平成18年3月30日の期間で実施し、遺物整理は、調査と並行する形で平成17年10月～平成18年度に渡り行われた。報告書の作成は、平成18年度に行われた。
4. 調査における遺構の実測・写真撮影は、(有)九州文化財リサーチ（広津鉄平・宮吉正明・堤 真子・宇都宮幸子）に委託した他、一部を衛藤亮介・奥村義貴・松竹智之・小住武史・仲矢咲紀・河野史郎（大分市教育委員会）が行った。
5. 本書における遺物の実測・製図作業は、首藤直美・上野美奈・小林ひろみ・橋本千代美・倉増美智代・佐藤京子・河野（大分市教育委員会）が行い。一部を(有)九州文化財リサーチに委託した。
6. 調査における自然化学分析（植物珪酸体分析）はパリーノサーヴェイ㈱に委託し、その結果は、本書の第IV章に記す。
7. 発掘調査及び報告書の作成に際して、下記の方々のご指導・ご助言・ご協力をいただいた。  
高橋 学（立命館大学）・佐藤孝則（大分市教育委員会）
8. 本書の執筆はⅠ～Ⅲ・Ⅴ章を河野、Ⅳ章をパリーノサーヴェイ㈱が行った。本書の編集は、河野が行った。

## 凡 例

1. 本書における遺構略号は以下を用いている。  
SK(土抗)・SH(住居跡)・SD(溝)・SB(掘立柱建物)・SF(道路状遺構)・SX(その他遺構)
2. 本書における遺構規模の表記はmを、遺物法量の表記はcmを用いている。
3. 遺構実測の基準方位は、国土座標（第Ⅱ座標系）を用いている。＊新座標
4. 本書における陶磁器の分類及び年代観は以下の文献による。  
肥前陶磁器…九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』  
中世輸入陶磁器…太宰府市教育委員会 2000『太宰府条坊XⅤ－陶磁器分類編－』  
備前焼陶器…乗岡 実 2000「中世備前焼（壺）の編年案」『第2回中世備前焼研究会資料』  
…乗岡 実 2000「中世備前焼播鉢の編年案」『第2回中世備前焼研究会資料』

目 次

I はじめに	
1. 調査に至る経過	1
2. 調査経過	1
3. 調査組織	2
II 遺跡の立地と環境	3
1. 遺跡の立地と環境	3
III 遺跡の調査	4
1. 調査区の設定と調査の概要	4
2. A区の調査（遺構）	6
3. A区の調査（遺物）	16
4. B区の調査（遺構）	23
5. B区の調査（遺物）	26
6. C区の調査（遺構）	31
7. C区の調査（遺物）	37
8. D区の調査（遺構）	39
9. D区の調査（遺物）	39
IV 自然化学的調査	41
1. 玉沢地区条里跡第15次調査区A・B・C区の植物珪酸体分析	41
V まとめ	47
1. 周辺埋没地形の復元	47
2. 条里状地割の形成時期について	49

挿 図 目 次

第1図 周辺主要遺跡分布図（1/20000）	3	第2図 調査地位置図（1/2500）	4
第3図 調査区配置図（1/600）	5	第4図 A区SB001遺構実測図（1/40）	6
第5図 A区遺構全体図（1/160）	7	第6図 A区SH003遺構実測図（1/80）	8
第7図 A区SX020水田土層断面図（1/40）	9		
第8図 A区SX020（水田1）SF021（道路1）遺構実測図（1/120）	10		
第9図 A区SX020（水田2）SF022（道路2）遺構実測図（1/120）	10		
第10図 A区SX020（水田4）SD010遺構実測図（1/120）	11		
第11図 A区SX020（水田5）遺構実測図（1/120）	12		
第12図 A区SX020（水田4）SD010遺構実測図（1/120）	13		
第13図 A区SX020（水田7）遺構実測図（1/120）	14	第14図 A区SX020（水田8）遺構実測図（1/120）	15
第15図 A区SX020（水田8）内土坑遺構実測図（1/20）	16	第16図 A区SH003出土遺物実測図（1/4）	16
第17図 A区SX020（水田）出土遺物実測図（1/4）（1/2）	17	第18図 A区SX020（水田）出土遺物実測図（1/4）	18
第19図 A区検出時出土遺物実測図（1/4）（1/2）	19	第20図 B区遺構全体図（1/160）	21～22
第21図 B区SH013遺構実測図（1/60）	23	第22図 B区SH005遺構実測図（1/60）	24
第23図 B区SX014・016遺構実測図（1/80）	25	第24図 B区北壁土層断面図（1/40）	25
第25図 B区SH013 出土遺物実測図（1/4）	26	第26図 B区SH005出土遺物実測図（1/4）	27
第27図 B区SX012・014・019出土遺物実測図（1/4）	28	第28図 B区SX017・020・021出土遺物実測図（1/4）	28
第29図 B区SD001・検出時出土遺物実測図（1/4）	29	第30図 C区SD002遺構実測図（1/80）	31
第31図 C区SD009土層断面図（1/40）	31	第32図 C区大畦畔土層断面図（1/40）	31

第33図	C区東壁土層断面図(1/40)	32	第34図	C区遺構全体図1(1/160)	33～34
第35図	C区遺構全体図2(1/160)	35～36	第36図	C区出土遺物実測図1(1/4)(1/2)	37
第37図	C区出土遺物実測図2(1/2)	38			
第38図	D区遺構全体図(1/160)	39			
第39図	D区出土遺物実測図(1/4)	39			
第40図	第15次調査区A・B・C区での植物珪酸体含量の層位的変化	44			
第41図	植物珪酸体	46	第42図	周辺埋没地形復元図	48
第43図	C区水田区画変遷図	50			

表目次

表1	A区出土遺物観察表	20
表2	B区出土遺物観察表	30
表3	C・D区出土遺物観察表	40
表4	第15次調査区A・B・C区の植物珪酸体含量	45

写真図版目次

巻頭カラー図版1	調査地遠景
写真図版	玉沢地区条里跡第15次調査発掘作業風景
写真図版1	1. A区調査区全景 2. B区調査区全景 3. C区調査区全景
写真図版2	1. C区調査区全景1 2. C区調査区全景2
写真図版3	1. A区SH003全景 2. A区SB001全景 3. A区SX020(水田1)全景 4. A区SX020(水田2)全景 5. A区SF021全景 6. A区SF022全景 7. A区SX020(水田4)全景 8. A区SD010全景
写真図版4	1. A区SX020(水田5)全景 2. A区SX020(水田6)全景 3. A区SX020(水田7)全景 4. A区SX020(水田8)北半近景 5. A区SX020(水田8)南半近景 6. A区SX020(水田8)内土坑全景 7. A区SH005・013全景 8. A区SH013全景
写真図版5	1. B区SH005全景 2. B区SH005遺物出土状況 3. B区SH005遺物出土状況2 4. B区SX014・016全景 5. D区SX001・002・003全景 6. D区SX004全景 7. C区SX005西半 8. C区SX005東半
写真図版6	1. C区SD002全景 2. C区SD002土層断面 3. C区SX008西半 4. C区SX008東半 5. C区大畦畔土層断面 6. C区SD009土層断面 7. C区SD009全景 8. C区調査区東壁土層断面
写真図版7	1. A区SH003-1 2. A区SX020-9 3. A区SX020-20 4. A区SX020-22 5. A区SX020-30 6. A区SX020-34 7. A区SX020-35 8. A区SX020-440
写真図版8	1. A区検出時-42 2. A区検出時-45 3. B区SH005-60 4. B区SH005-61 5. C区SX006-106 6. C区SX008-110 7. C区SX008-116 8. D区SX004-125

# I はじめに

## 1. 調査に至る経過

玉沢地区条里跡は、大分川及びその支流である七瀬川流域において条里状の地割りが良好に残存する地域として、周知の埋蔵文化財包蔵地とされている。

近年の大規模商業施設の郊外進出及びこうした施設を中心とする民間による区画整理等の開発は、この玉沢地区にも及んでいるところであり、当該地区における文化財の発掘調査の件数は増加の一途をたどり、今回の調査に至るまでに14次を数えるに至っていた。

このような状況下、市中央区画整理準備委員会による大分市大字市字大坪1番1号外18筆における区画整理が計画され、文化財課への照会の結果当該地区は、玉沢地区条里跡に含まれることが確認された。しかしながらこの区画整理事業には、大分市都市計画部街路建設課による都市計画道路市玉沢線の道路建設工事及び、大分市下水道部下水道施設課による公共下水道植田処理区宗方2号雨水幹線サイフォン部改修工事等複数の公共工事を伴うものであった。このことから、大分市都市計画部まちなみ整備課が中心となり、区画組合及び大分市の関係各課の協議が重ねられた。協議の結果、大分市教育委員会文化財課が区画整理の主体者となる市中央区画整理準備委員会の委託を受け付け、平成16年5月～6月にかけて、区画整理予定地内における広域の文化財確認調査を行った。この確認調査では、通常の遺跡の有無に加え、遺跡の内容、遺跡が検出されるまでの深さ等を確認し、微高地に形成された集落及び、水田面と微高地がセットで確認できる箇所のみを本調査対象地区とする今後の当該区画整理予定地内全体における調査方針を確定するに至った。

今回の大分市都市計画部街路建設課による市玉沢線道路建設予定地は、遺跡の残存が見込めない現道下を除くほぼ全域が本調査対象地区に含まれることとなったが、協議の結果文化財発掘調査については、道路下に組合施工のボックスカルバート設置工事を伴う道路建設予定地西半部の調査を平成16年度の区画組合の受託事業として、同じく大分市単独施工予定地東半部の調査は、平成17年度の街路建設課の事業としてそれぞれ行うこととなった。

大分市都市計画部街路建設課による市玉沢線道路建設に伴う発掘調査は、平成17年9月1日～平成18年3月30日まで行われた。資料整理及び報告書の作成については、一部調査に平行する形で平成17年10月1日から平成18年3月31日及び、平成18年4月1日～平成19年3月31日まで行われた。

## 2. 調査経過

玉沢地区条里跡第15次調査区の調査経過の略述は以下のとおりである。

- 9月1日 調査区の設定及び調査準備開始
- 9月12日 B区表土剥ぎ開始
- 9月20日 作業員を入れての作業開始
- 10月29日 B区空中写真撮影
- 11月17日 C区表土剥ぎ開始
- 12月1日 ベルトコンベアー・キャリアを使った作業開始
- 1月12日 C区1回目空中写真撮影
- 1月25日 A区表土剥ぎ開始
- 2月15日 C区2回目空中写真撮影
- 2月20日 D区表土剥ぎ
- 3月28日 A区D区空中写真撮影
- 3月30日 調査終了



### 3. 調査組織

平成17年度(発掘調査及び資料整理)

調査主体	大分市教育委員会		
調査責任者	秦 政博 (大分市教育委員会 教育長)		
事務局	大分市教育委員会	教育総務部	文化財課
	佐藤 功	(大分市教育委員会 文化財課	課長)
	玉永 光洋	(大分市教育委員会 文化財課	参事)
	讃岐 和夫	(大分市教育委員会 文化財課	課長補佐兼文化財係長)
	安東 時男	(大分市教育委員会 文化財課	管理係長)
	平野 勝敏	(大分市教育委員会 文化財課	管理係 主査)
	加藤 キヌ	(大分市教育委員会 文化財課	管理係 主事)
	大分市 都市計画部 街路建設課		
	重見 崇至	(都市計画部 街路建設課	課長)
	幸 信介	(都市計画部 街路建設課	主査)
	野口 理恵	(都市計画部 街路建設課	主任)
調査員	河野 史郎	(大分市教育委員会 文化財課	主任)
	衛藤 亮介	(大分市教育委員会 文化財課	嘱託)
整理作業員	首藤 直美	(大分市教育委員会 文化財課	臨時職員)
	上野 美奈	(大分市教育委員会 文化財課	臨時職員)

平成18年度(資料整理及び報告書作成)

調査主体	大分市教育委員会		
調査責任者	秦 政博 (大分市教育委員会 教育長)		
事務局	大分市教育委員会	教育総務部	文化財課
	佐藤 功	(大分市教育委員会 文化財課	課長)～H18.9
	玉永 光洋	(大分市教育委員会 文化財課	課長)H18.10～
	玉永 光洋	(大分市教育委員会 文化財課	参事)
	塔鼻 光司	(大分市教育委員会 文化財課	文化財係長)
	安東 時男	(大分市教育委員会 文化財課	管理係長)
	幸 俊昭	(大分市教育委員会 文化財課	管理係 主査)
	加悦 真里	(大分市教育委員会 文化財課	管理係 主任)
	大分市 都市計画部 街路建設課		
	重見 崇至	(都市計画部 街路建設課	課長)
	小花 裕子	(都市計画部 街路建設課	主査)
	野口 理恵	(都市計画部 街路建設課	主任)
調査員	河野 史郎	(大分市教育委員会 文化財課	主任)
整理作業員	橋本千代美	(大分市教育委員会 文化財課	臨時職員)



## Ⅱ 遺跡の立地と環境

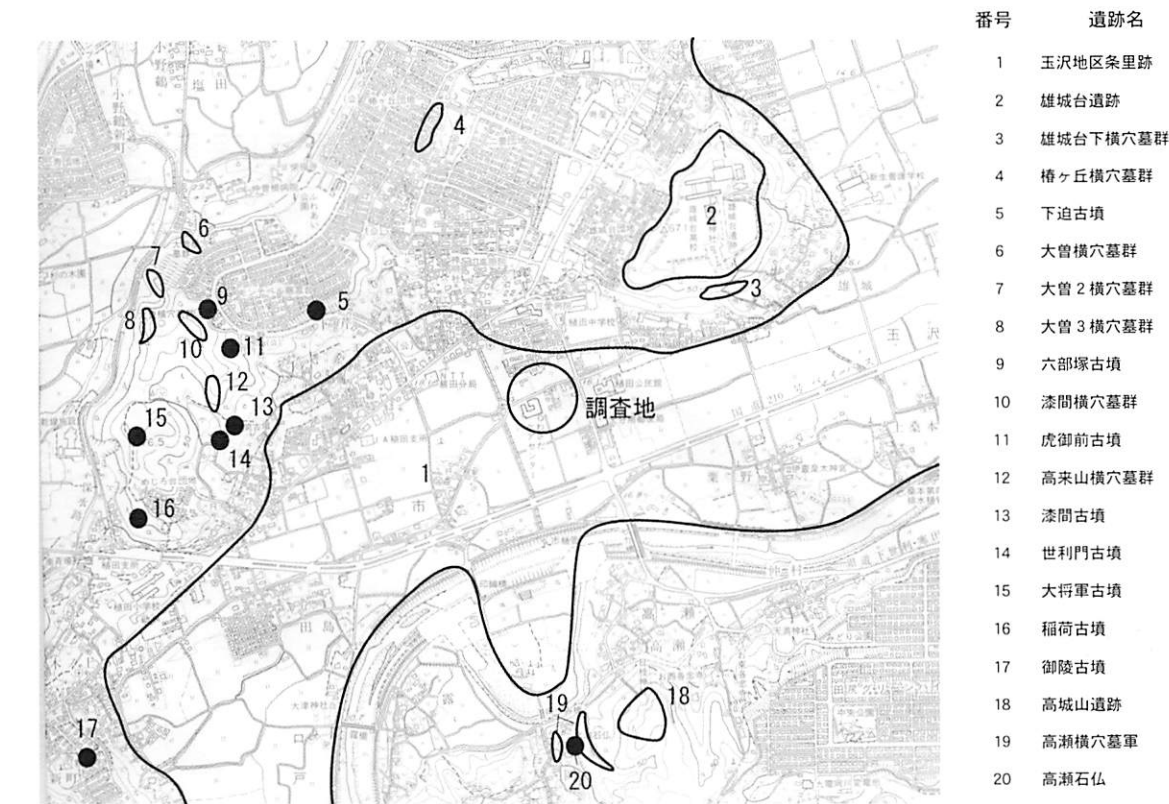
### 1. 遺跡の立地と環境

玉沢地区条里跡は、七瀬川流域及び大分川の一部流域に形成された沖積低地上に立地する。遺跡の南東側には七瀬川がその端に沿う形で流れ、その名の通り大きく蛇行を繰り返しながら、遺跡の北東端部分で本流である大分川と合流する。遺跡の北東側には大分川本流がその端に沿う形で流れ、北西部一帯には、宗方から木の上の独立丘陵が連なる。

調査が行われた玉沢地区条里跡第15次調査区は、遺跡の中央やや西側に位置し、七瀬川が大きく蛇行する地点の延長線上、現在の市の集落とほぼ重なる箇所となる。

周辺主要遺跡については、縄文時代の遺跡としては、後期及び晩期末(弥生時代早期)の遺構・遺物が確認された植田市遺跡等が知られる。弥生時代の遺跡としては、前期末～後期終末にかけての拠点集落として知られる雄城台遺跡が存在する。古墳時代の遺跡としては、当該地区で唯一の前方後円墳である御陵古墳を筆頭としたマウンドを有する古墳群や、横穴墓群の存在が知られている。古代・中世の遺跡としては、中世居館が確認された植田市遺跡がある。

今回の調査対象となる玉沢地区条里跡については、これまで14の調査次数を数え、調査成果が積上げられてきた。特に水田遺跡の調査は、弥生時代の流路や井関、古墳時代の小区画水田の検出等の成果を上げている。更にこれら水田との関連が指摘される弥生～古墳時代の集落が、点在する微高上に形成されていることもわかっており、その調査の対象が水田のみから集落を含めた総合的なものへと広がっている。なお、条里状地割りの形成時期については、その詳細な検討はなされておらず、条里状地割りの形成時期についても本遺跡における重要なテーマとなっている。



第1図 周辺主要遺跡分布図 (1/20,000)

### Ⅲ 遺跡の調査

#### 1. 調査区の設定と調査の概要

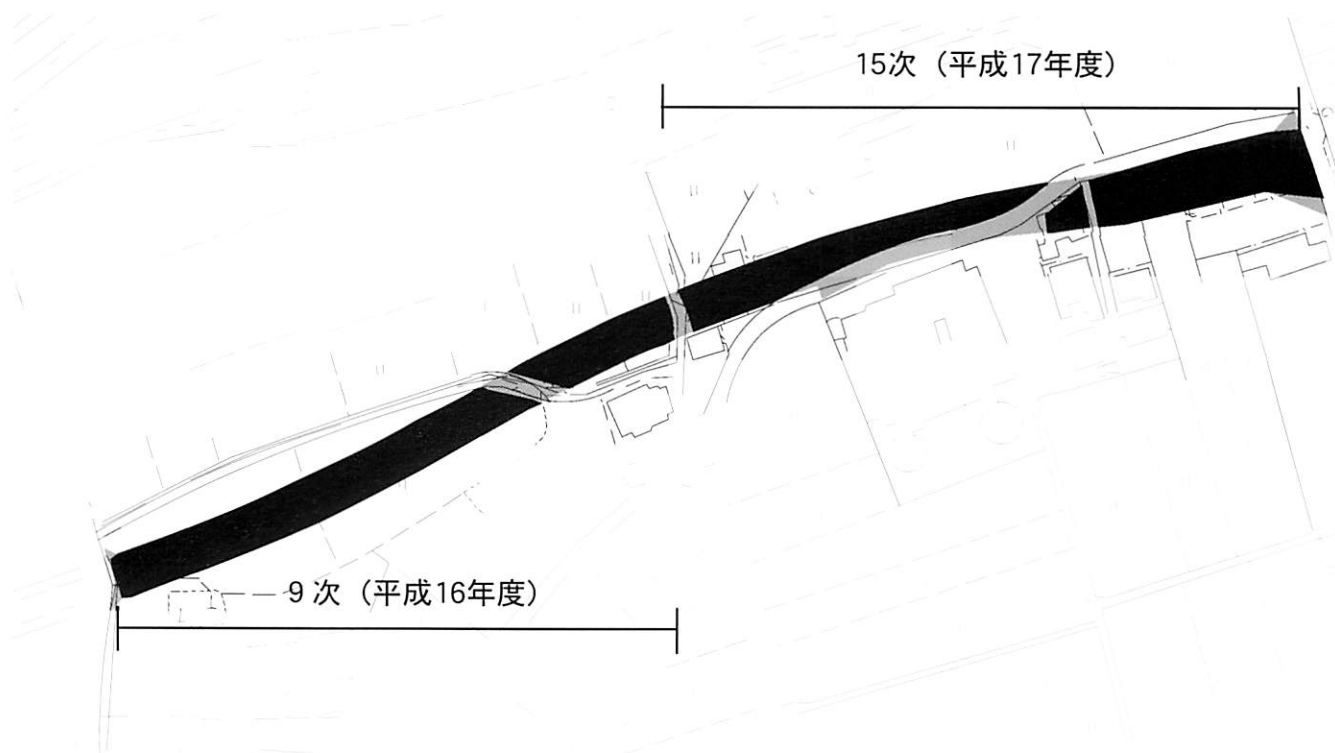
都市計画道路市玉沢線建設は、市の集落の北端部を東西に横断する形で計画された。この道路建設に伴う発掘調査は、道路下に区画整理組合施工のボックスカルバート設置工事を伴う道路建設予定地西半部の調査を平成16年度の区画組合の受託事業として、同じく大分市単独施工予定地東半部の調査は、平成17年度の街路建設課の事業としてそれぞれ行うこととなった。

今回の調査対象となった東半部の調査は、埋設物の影響で遺跡の残存が見込めない現道下の部分をさける形で行われることとなったため、大きく3ヶ所に分かれ、更に家屋移転の関係上やはり調査期間が分断することとなった1ヶ所を加えたA～D区の4つの調査区に分けられた。

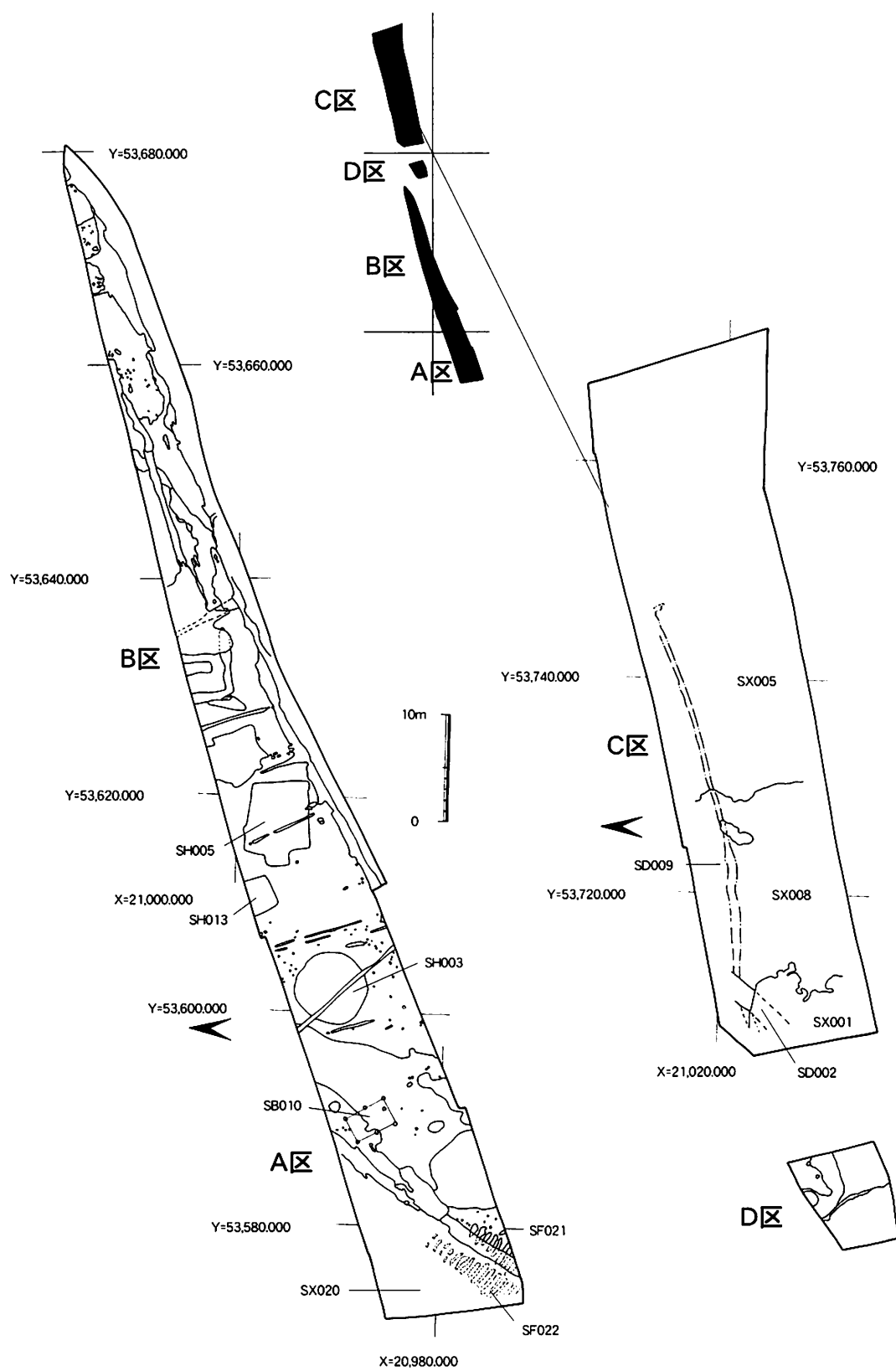
調査の結果A区からは、掘立柱建物、竪穴住居が検出された。加えてその西端部には、クレバススプレーの特徴とされる低地が入り江状となった微高地の先端部が確認され、低地部分には畦畔等の施設を伴う水田跡が、低地との境界部分からは道路状遺構も検出された。A区の調査成果では、この道路跡等の関連遺構を伴う形での水田遺構の変遷が特筆される。

B区はA区の東に続く形で設定され、近世の水路及び竪穴住居及び不明の溝状遺構が検出されている。B区の東側については、A区とは対照的に緩やかな傾斜をもって低地へ向かう状況が確認されており、水田層、溝等が確認されている。B区の調査成果では、高坏を主体とする遺物組成を有し、突出部をもつ特異な形態の住居跡の存在が特筆される。

C区・D区は、今回の調査区の東端部にあたり、溝及び水田層が確認されている。C区・D区の調査成果では、旧地形に沿った溝状遺構にその方向性を合わせる中世前半期の水田から、現在復元されている条里状地割りにその方向性を合わせる水田への変遷が特筆される。



第2図 調査地位置図 (1/2,500)



第3図 調査区配置図 (1/600)

## 2. A区の調査（遺構）

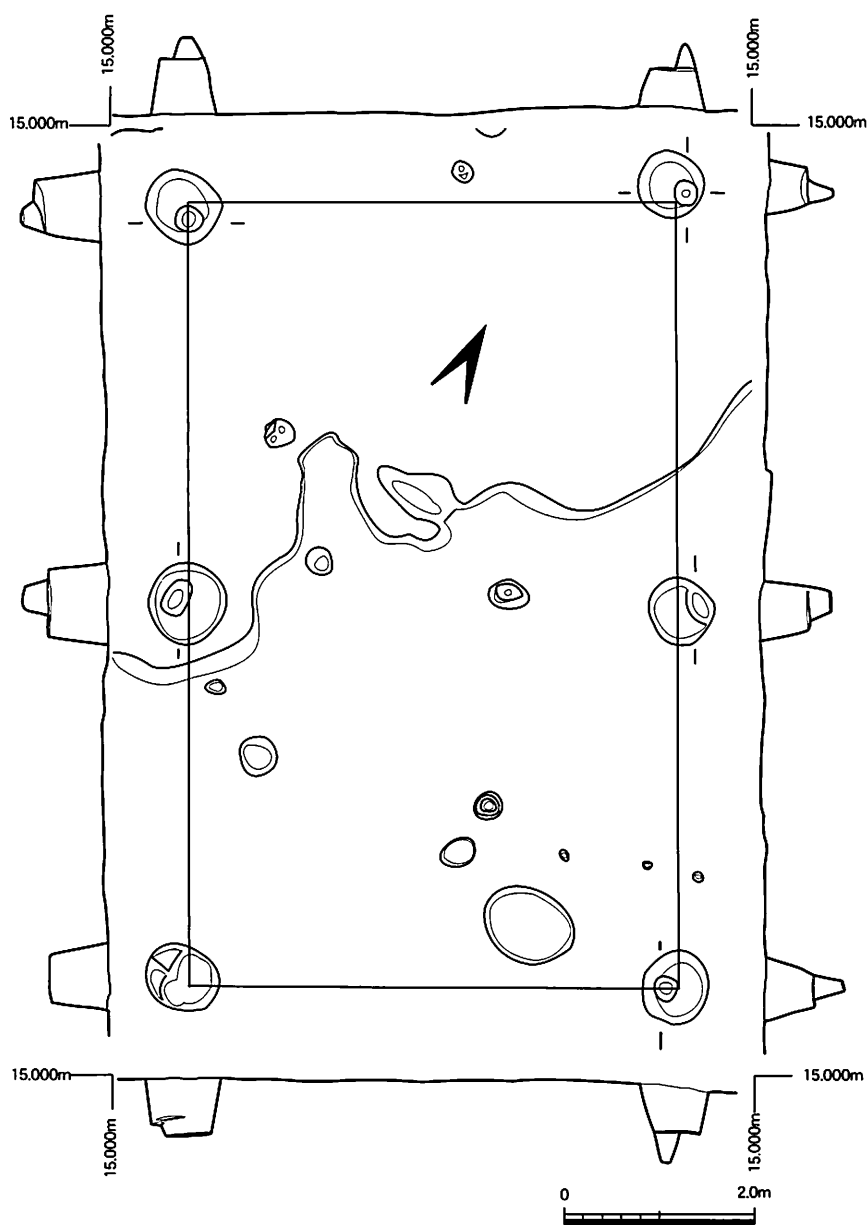
A区の調査では、掘立柱建物（SB001）、円形の竪穴住居（SH003）、溝状遺構（SD010他）、道路状遺構（SF021・022）、水田遺構（SX020）他、小穴等が検出されている。

### 掘立柱建物（SB）

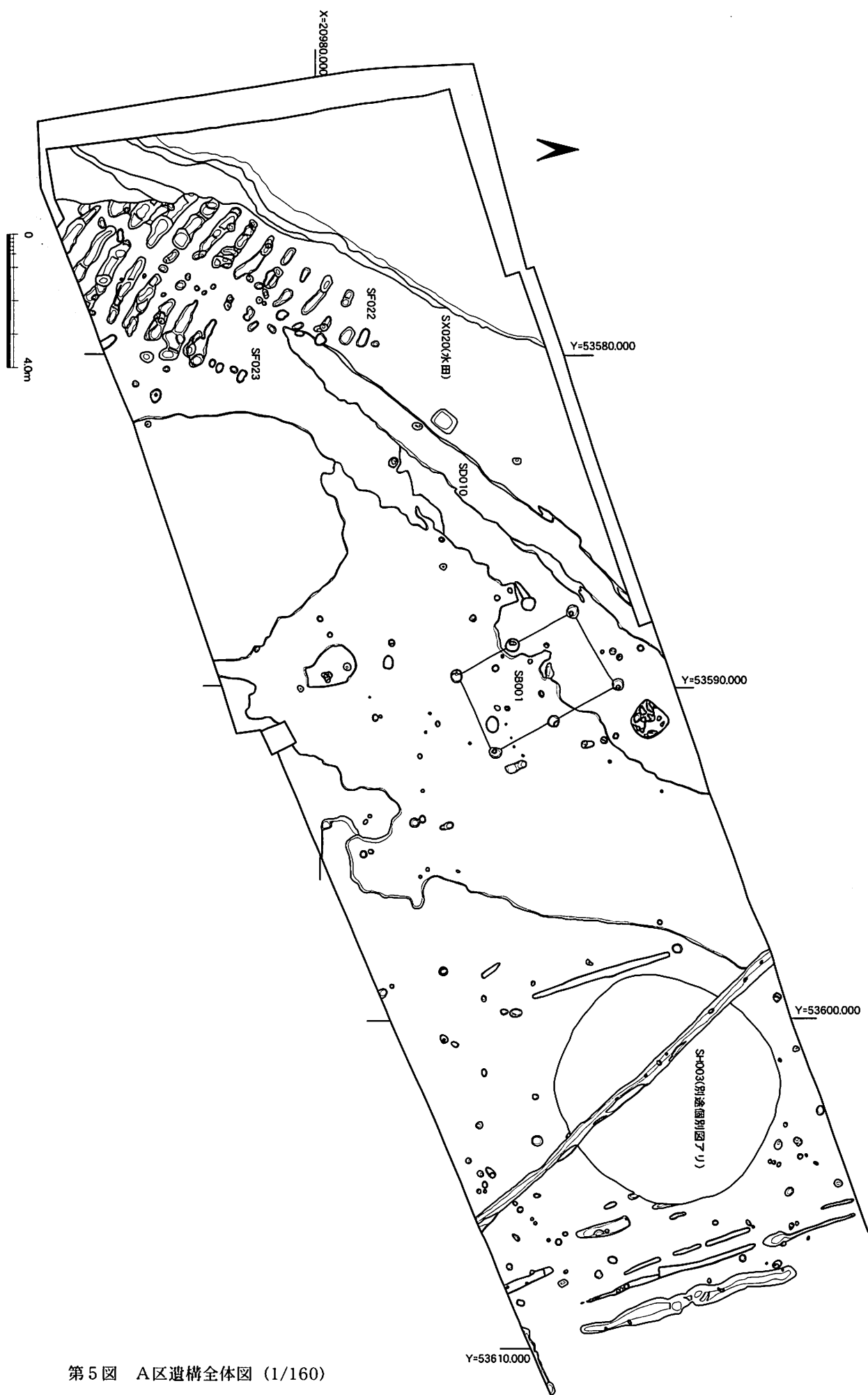
掘立柱建物は1棟検出されている。

### SB001（第4図）

調査区のほぼ中央北よりで確認される。主軸方位N-32°-Wの南北棟建物で、1間(2.6m)×2間(4.1m)の規模を測る。梁行柱間は2.6mを測り、桁行柱間は2.05m～2.1mを測る。柱穴の平面形は円形～不整円形を呈し、径は0.32m～0.42m、深さは0.35m～0.42mを測る。各柱穴からの出土遺物は小片で時期を特定するに至らないが、その破片から古代・中世に属する可能性は低い。



第4図 A区 SB001 遺構実測図（1/40）



第5図 A区遺構全体図 (1/160)

## 竪穴住居(SH)

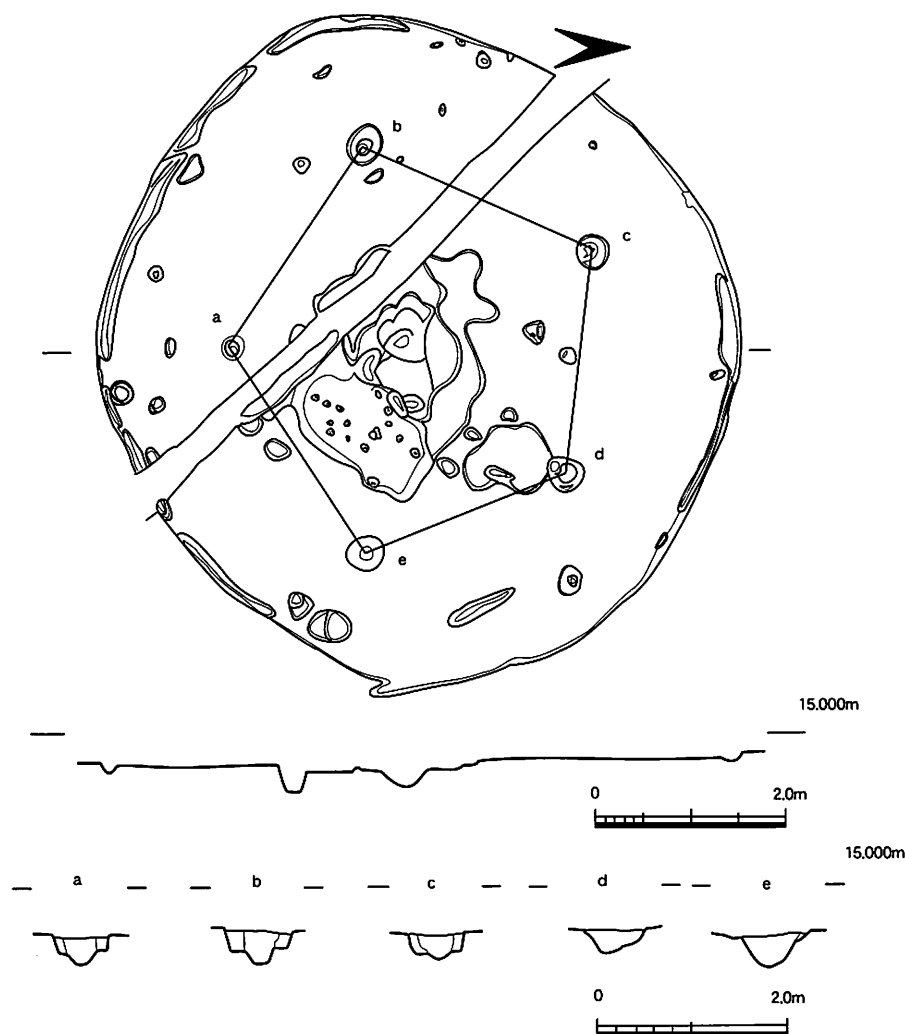
竪穴住居は1棟検出されている。

### SH003(第6図)

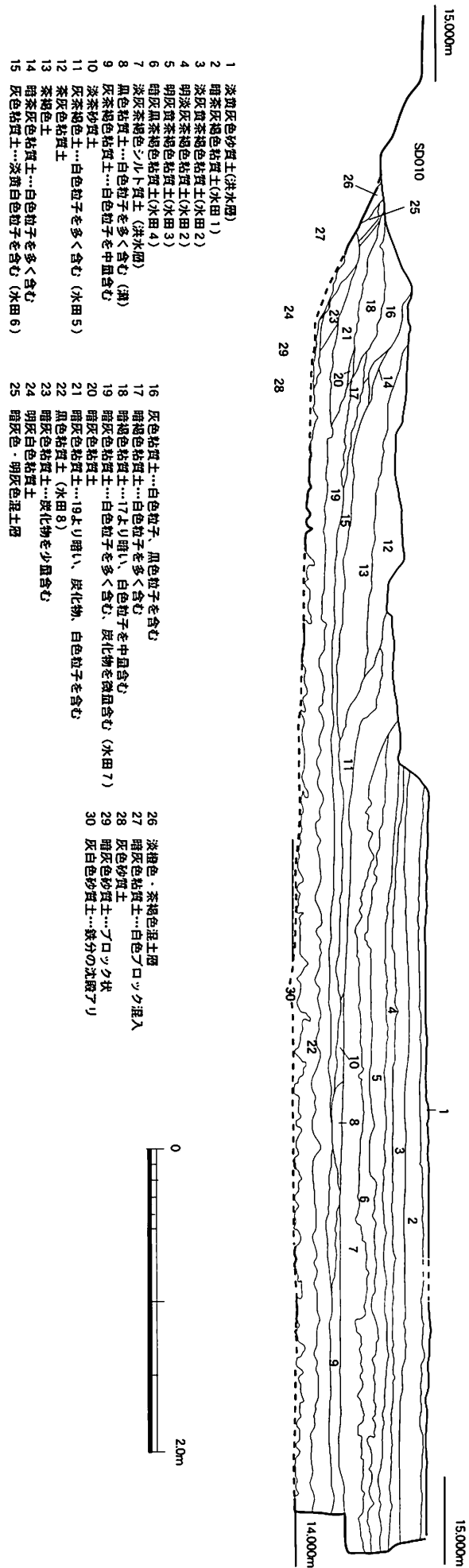
調査区の東端に近い位置で確認される。径6.5m～6.6mを測る平面円形の竪穴住居で、5本の支柱穴を有する。検出面から床面の深さは0.1m前後を測り、残りは良いとは言えない。幅0.2m、深さ0.2mの壁溝が住居の南面を中心に巡る。一方北面には北側の一部を除き確認されていない。中央部は全体に不定形の窪みを有し、その中心には、径0.5m、深さ0.25mの炉跡と考えられる床面が被熱した浅い掘り込みが存在する。加えて中央部やや南には、埋土に炭化物や焼土等が観察される長軸1.7m、短軸1.0mを測る平面楕円形の土坑が、前述の不定形の窪みと一部を接する形で検出されている。

支柱穴は5本で、柱間は2.24m～2.66mを測る。柱穴の平面形は、円形～不整円形を呈し、径は、0.3m～0.34m、深さは0.12m～0.2mを測る。

出土遺物には、弥生土器甕、脚付鉢等があり、弥生時代後期前葉に位置づけられると考えられる。

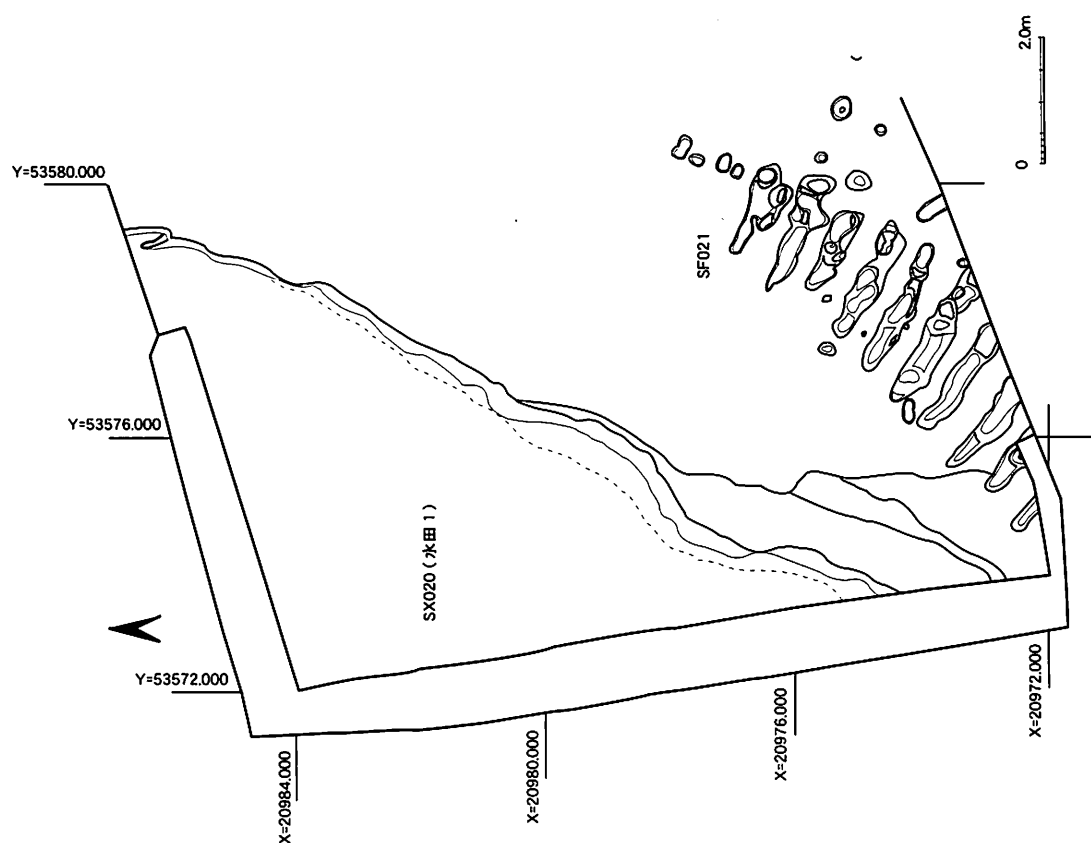


第6図 A区 SH003 遺構実測図 (1/80)

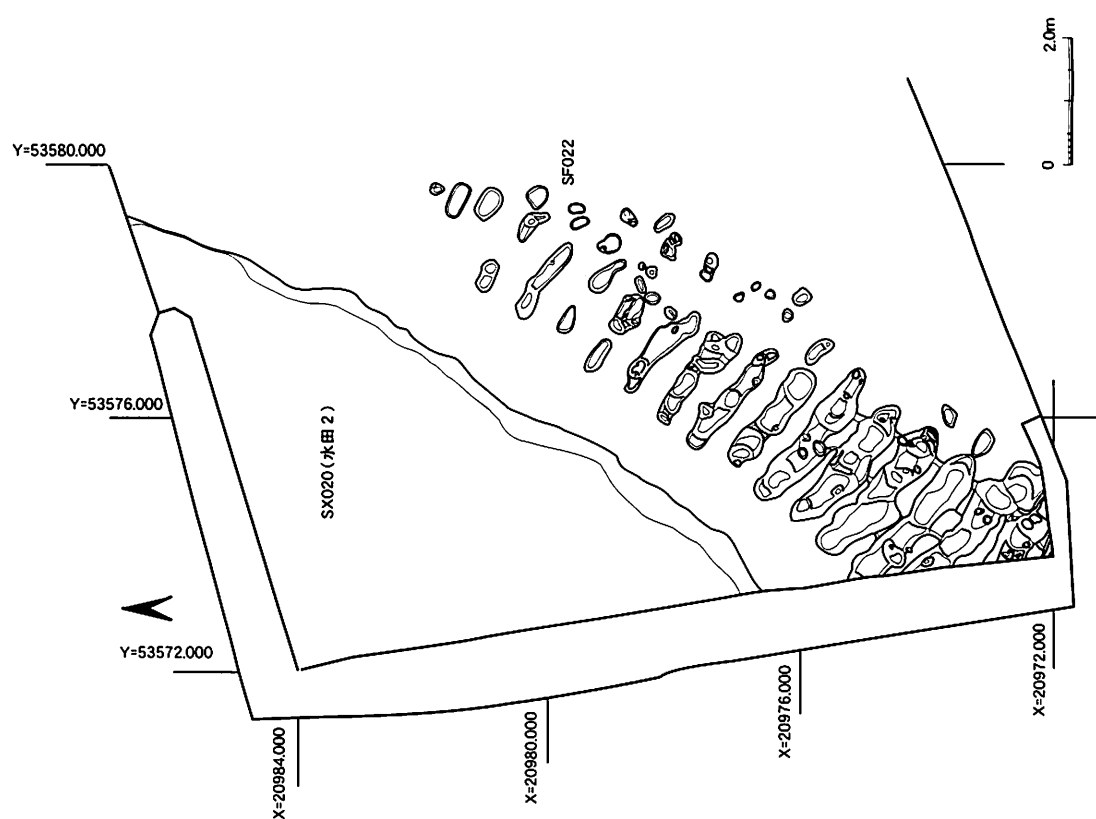


第7図 A区SX020水田土層断面図 (1/40)





第 8 図 A区SX020 (水田 1) SF021 (道路 1) 遺構実測図 (1/120)



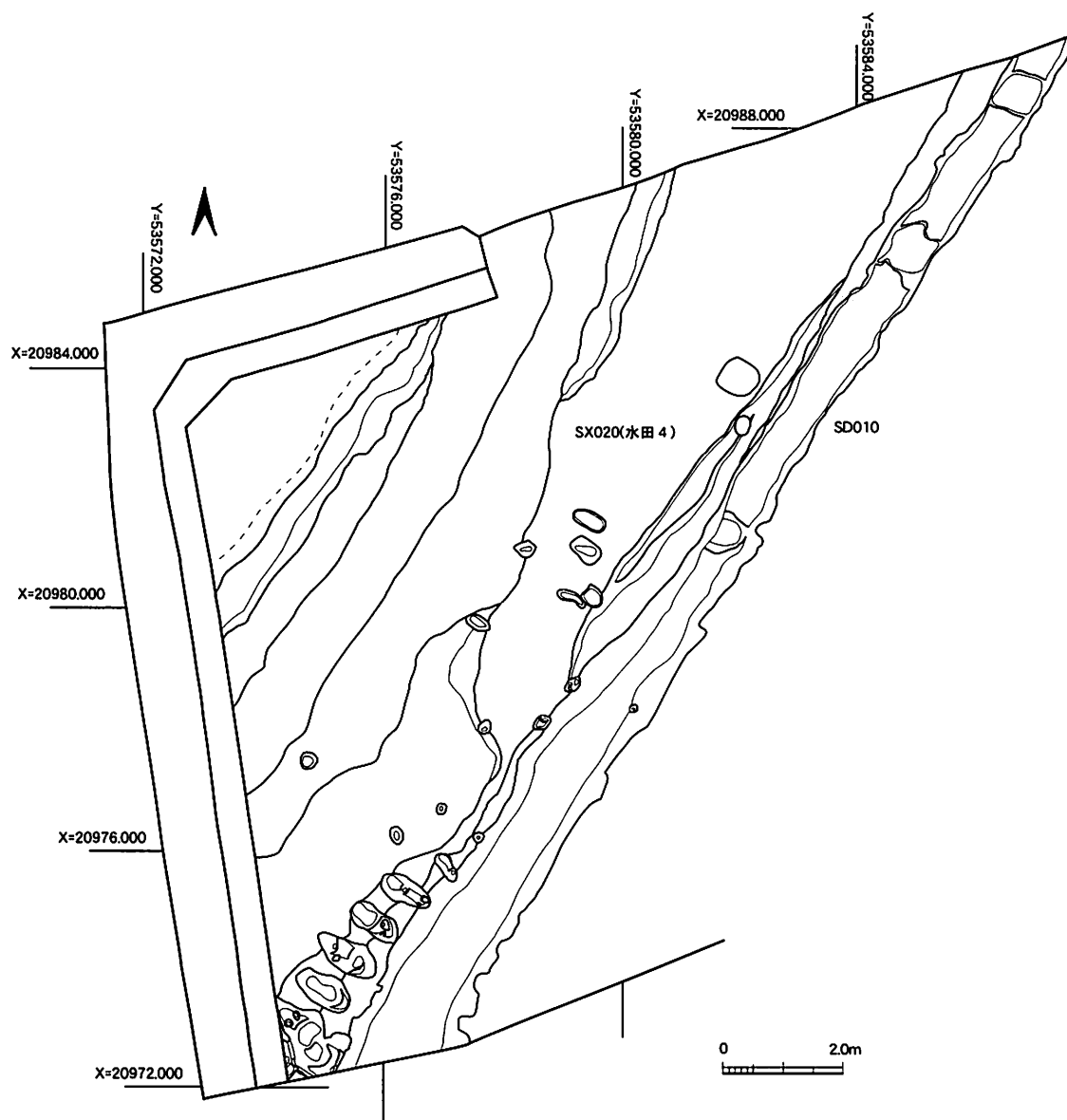
第 9 図 A区SX020 (水田 2) SF022 (道路 2) 遺構実測図 (1/120)

## 水田遺構(SX・SD・SF)

水田遺構は、調査区西端部で検出されている。前述したクレバススプレーによる微高地の先端部で確認される入り江状の落ち込み部分に形成された水田遺構であり、SX020中央部に設置された土層ベルト(第7図)の観察の結果、洪水による堆積と耕作の繰り返しの状況が確認され、複数時期にわたって使用されていることが確認されている。この入り江状の落ち込み部分と微高地との比高差とこの洪水による堆積が、今回の水田及び水田関連遺構の良好な保存状況を生むこととなっている。この水田遺構に関連する溝跡(SD)、道路跡(SF)に付いても一連の遺構であると考え、以下、時期を追って報告する。

SX020(水田1)・SX020(水田2)・SF021・SF022 (第8図・9図)

SX020(水田1)・SX020(水田2)は、淡黄灰色砂質の洪水層である1層の下で検出された水田層である。波板状の連続土坑を有する道路(SF021・022)を伴い、土層図における2層(暗茶灰褐色粘質土)、3層(淡灰黄茶褐色粘質土)4層(明淡灰茶褐色粘質土)がこれに相当する。水田域が最も低地の中心部に近い位置で検出される段階である。水田部と微高地との比高差は少なく、水田内部の遺構は検出されていない。水田1と水田2については、水田1のほうが南部でやや内陸部へ向け広がる様相を示している。



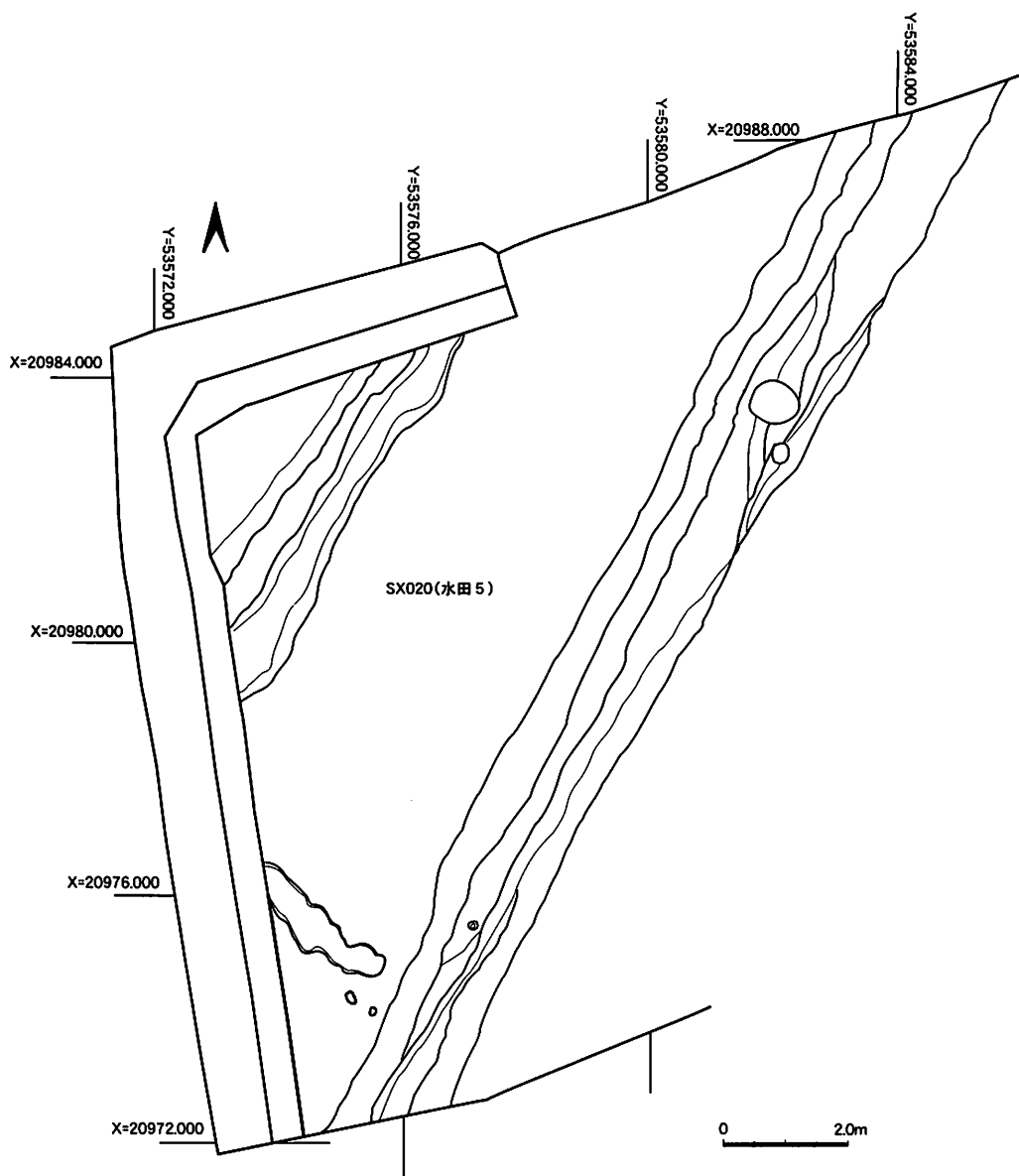
第10図 A区SX020(水田4)SD010遺構実測図(1/120)

水田に平行する形で検出されている道路(SF021・022)については、いわゆる波板状の連続土坑を有するもので、その規模や構造から畦道というよりはむしろ農道といった性格のものであると考えられる。波板状の連続土坑については、その平面形は不整円形の小型のものと、長細い楕円形を呈する2種類存在し、その埋土はやや堅く締まったシルト質のものであった。この二つの道路(SF021・022)には切合いが存在し、SF021が新しくSF022が古く位置づけとなる。

この道路跡の性格付けについては、単なる畦道のような簡易な道路でこのような波板状の連続土坑を採用した事例が無いことから、ある程度固定的・安定的に使われた道路であることが考えられる。加えてこの波板状の連続土坑が、地盤の安定する北東部になると消滅する状況を見ると、もともと古い段階で水田であった緩い地盤を改良するために部分的に用いられた状況が窺える。一方で主要幹線的な位置づけでもないようである。このような状況を加味したうえで、この道路跡については、集落と水田をつなぐ農道的な位置づけを考えたい。

出土遺物には、水田2の耕作土中より出土した白磁V類及び底部糸切り離しの土師器坏皿がある。波板状の連続土坑からの出土遺物については小片のみでその詳細は不明である。

これらの遺構群時期は前述の遺物等から中世前半期の位置づけを考えたい。



第11図 A区SX020 (水田5) 遺構実測図 (1/120)

## SX020(水田 3)

SX020(水田 3)の耕作土は、5層(明灰黄茶褐色粘質土)で確認されている。5層(水田 3)については面的な広がりを見せなかったことから、土層観察のみの所見となる。

出土遺物には土師器の高台付きの坏がある。

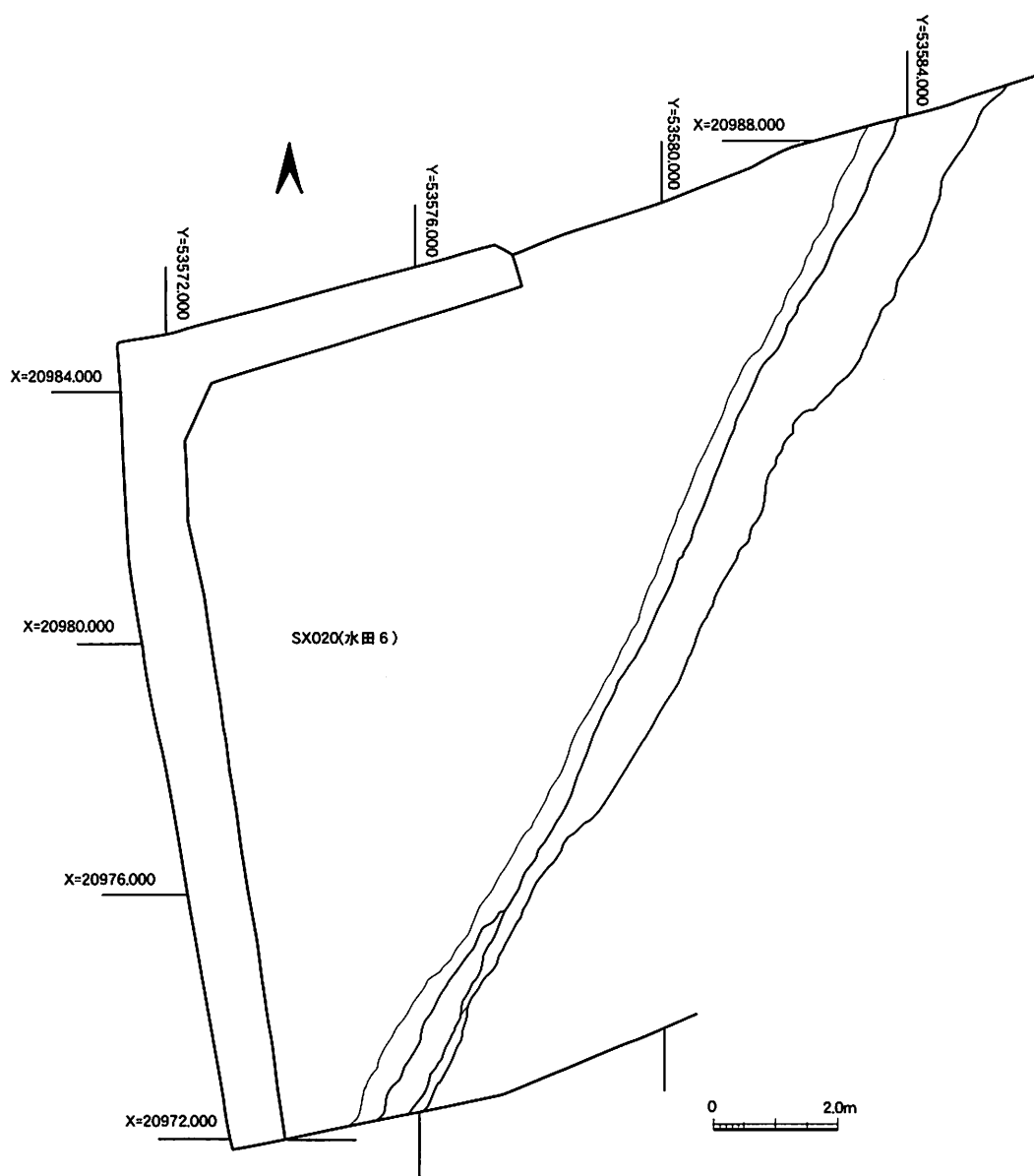
水田 3の時期は、前述の遺物等から古代から中世初期の位置づけを考えたい。

## SX020(水田 4)SD010(第10図)

SX020(水田 4)は、溝状遺構(SD010)を伴う水田で、6層(明灰黒茶褐色粘質土)がこれに相当する。その水田域の範囲は内陸部へ広がりを見せ、その境界部分に平行してSD010が延びている。微高地との比高差の少ないテラス状の部分と、比高差を有する水田の最深部の大きく2段に分かれている。

SD010は幅0.7m～1.1m、深さ0.15m～0.3mを測る。水田部との境界と平行して延びることに加え、水田部との比高差を考慮すると水田への給水用の溝であったことが推測される。

出土遺物は検出されていない。



第12図 SX020 (水田 6) 遺構実測図 (1/120)

水田 4 の時期は、その層位的な位置づけから水田 3 と水田 5 の中間の位置づけを考えたい。

SX020(水田 5 )(第11図)

SX020(水田 5 )は、7層(淡灰茶褐色シルト質土)の洪水層による間層を挟んだ下層で確認されている。11層(白色粒子を多く含む灰茶褐色土)がこれに相当し、中央部に 8 層(黒色粘質土)を埋土にもつ水田岸部に平行する溝とそれに直行する溝を有する。微高地との比高差は更に大きく(深く)なり、水田 4 でみられたテラス状の部分がない。

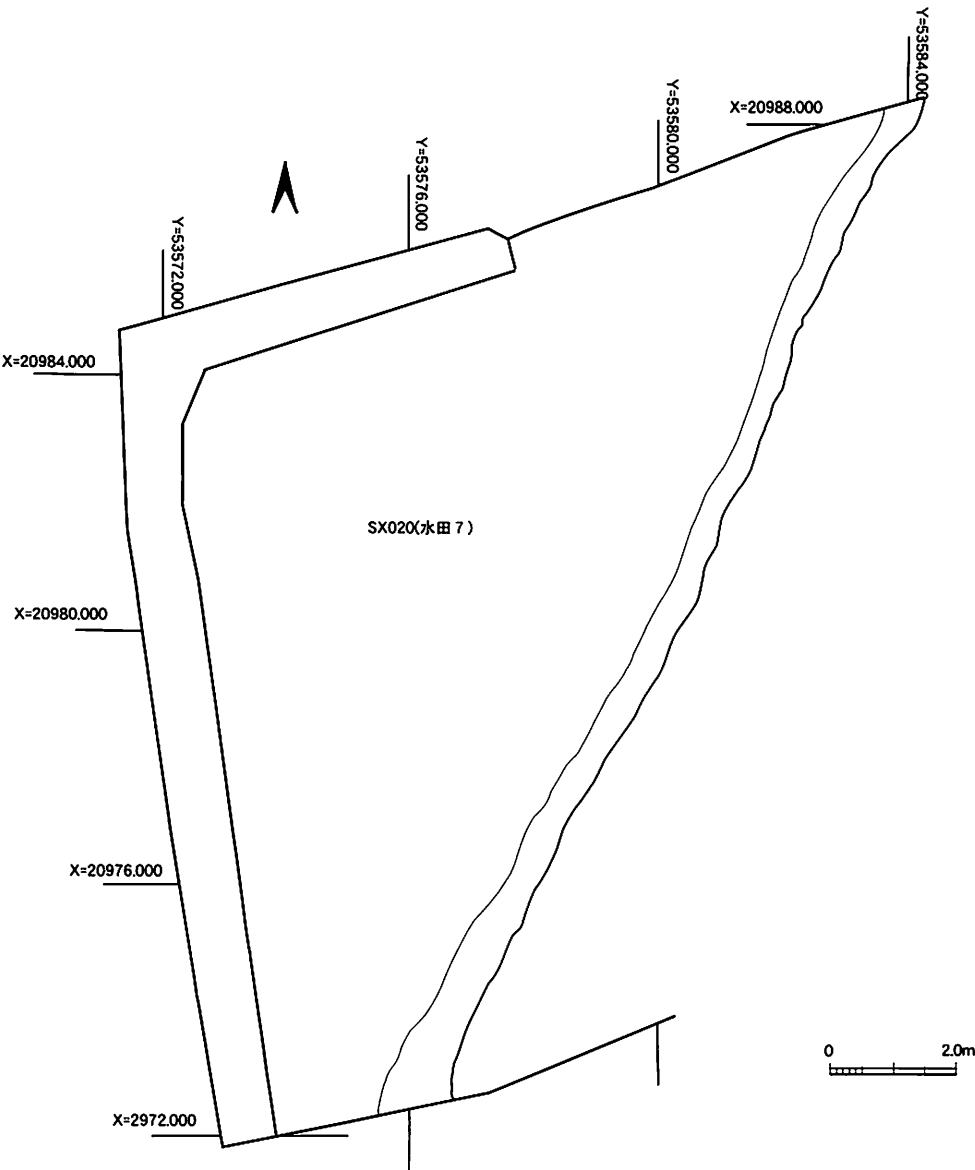
出土遺物には須恵器坏身がある他、このSX020(水田 5 )バックする洪水層である 7 層からは、須恵器坏身・蓋、壺、甕がある。

水田 5 の時期は、前述の遺物等から 6 世紀後半～7 世紀初頭の位置づけを考えたい。

SX020(水田 6 )(第12図)

SX020(水田 6 )は、15層(淡黄白色粒子を含む灰色粘質土)がこれに相当する。比較的薄い耕作土であったため水田内の遺構については不明であった。

出土遺物には、須恵器坏身、土師器壺、高坏がある。



第13図 A区 SX020 (水田 7) 遺構実測図 (1/120)

水田6の時期は、前述の遺物等から6世紀後半～7世紀初頭の位置づけを考えたい。

SX020(水田7)(第13図)

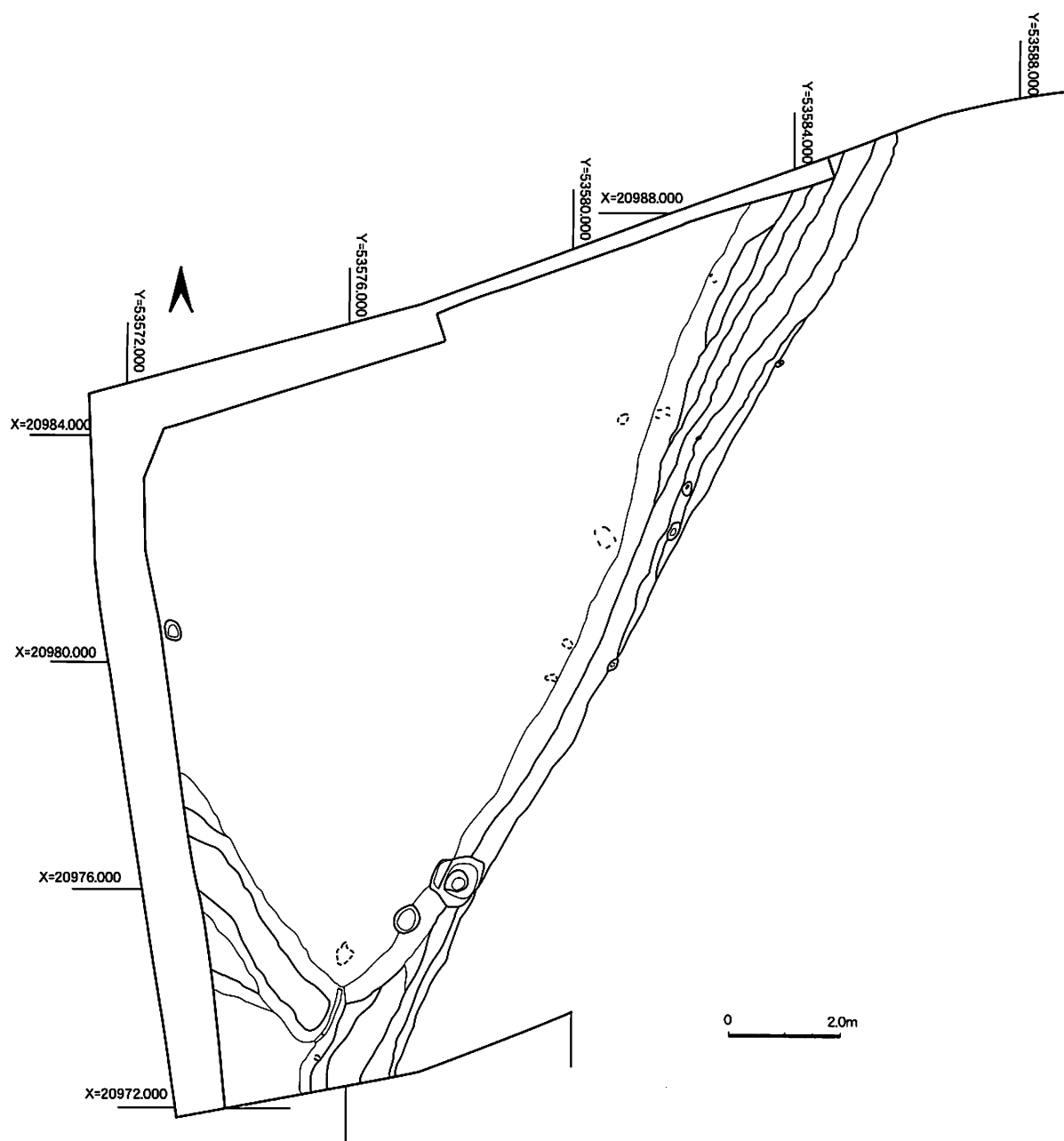
SX020(水田7)は、19層(白色粒子及び炭化物を含む暗灰色粘質土)がこれに相当する。床面はフラットで、畦等は検出されていない。

出土遺物には、須恵器坏蓋、土師器壺・甕・高坏がある。

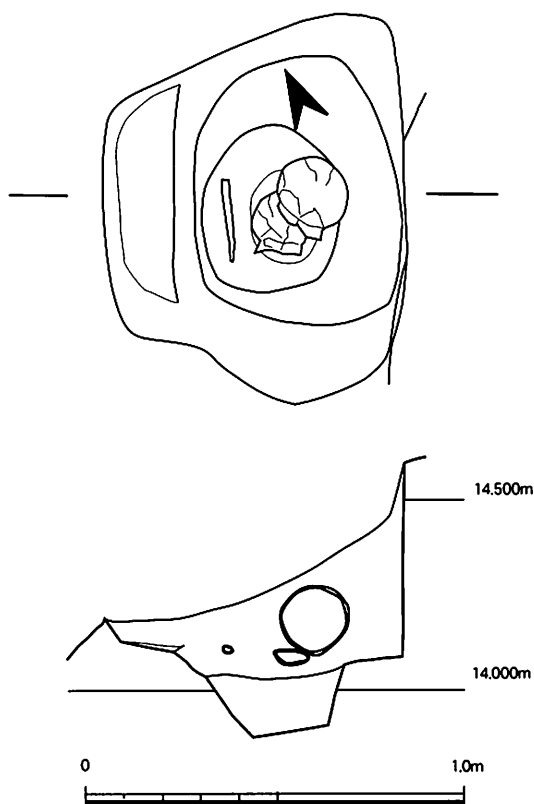
水田7の時期は、前述の遺物等から6世紀中頃～後半の位置づけを考えたい。

SX020(水田8)(第14図)

SX020(水田8)は、22層(黒色粘質土)がこれに相当する。水田の落ち際に遺物の集中するブロックが確認され、南西部には水田内土坑が検出されている。更に調査区の南西隅には畦畔が検出されている。基盤層を削り出す形で作られたこの畦畔は、高さを有し比較的しっかりとした造りとなっている。この畦畔と水田の落ち際の接する



第14図 A区 SX020(水田8)遺構実測図(1/120)



第15図 A区 SX020（水田8）遺構実測図（1/120）

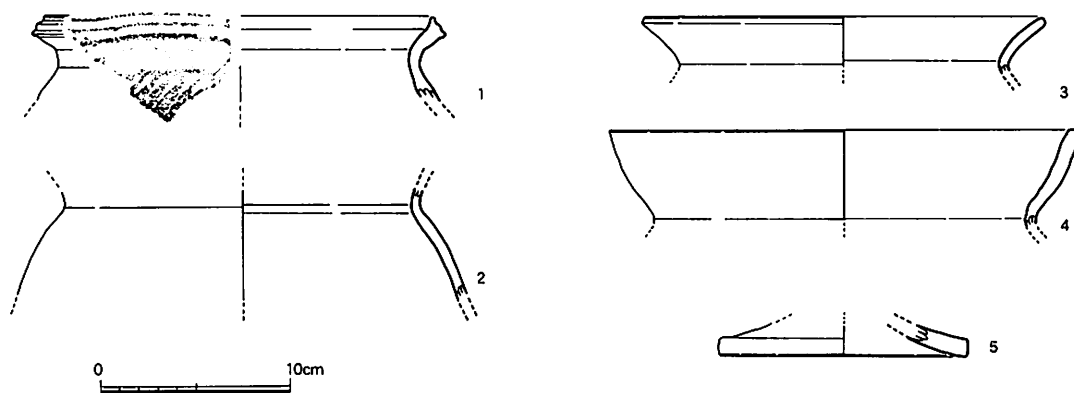
### 3. A区の調査（遺物）

1～5はSH003の出土遺物である。1～4は甕である。1は、復元口径20.6cm、口縁端部の外面2条の沈線を巡らし、頸部にはヘラ状工具による刺突連点文が施される瀬戸内系の甕である。3は復元口径21.4cmを測る甕、4は同じく25.0cmを測る甕である。5は、復元底径13.2cmを測る台坏鉢の脚部で、赤色顔料が施されている。

6～9はSX020(水田2)の出土遺物である。6は太宰府分類V類の白磁碗である。7.8は土師器の小皿と坏である。復元底径はそれぞれ6.6cm、8.2cmを測る。共に底部糸切り離しである。9は石錘である。凝灰岩製のもので、2ヶ所に凹状の加工が施されている。長軸で7.7cm、短軸で7.5cmを測る。

10はSX020(水田3)の出土遺物である。10は高台付の坏である。復元高台径は7.2cmを測る。

11～14はSX020(洪水層)の出土遺物である。11は須恵器坏蓋である。12は須恵器坏身である。復元口径12.6cmを測る。13は須恵器壺である。復元口径11.6cmを測る。14は須恵器甕である。



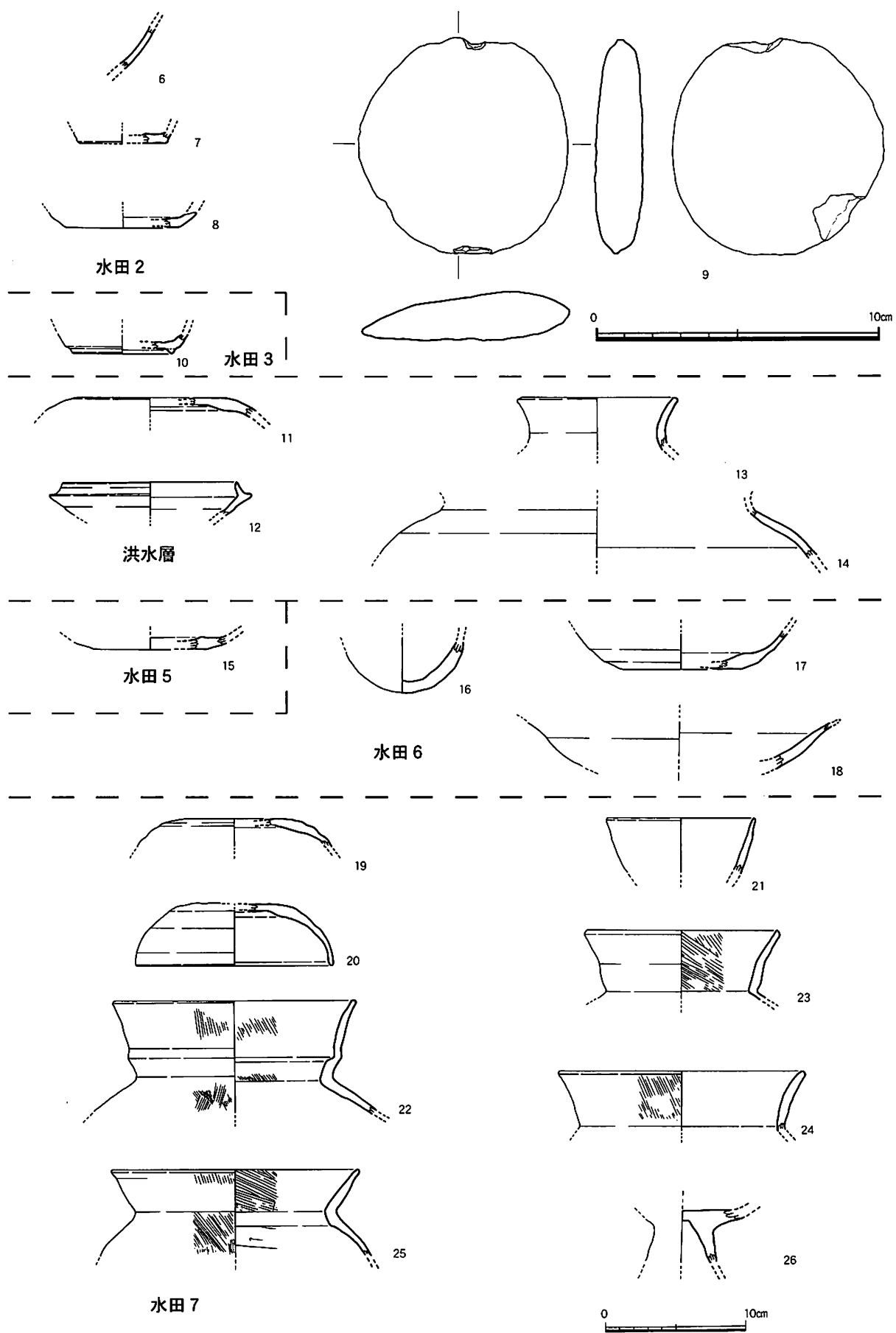
第16図 A区 SH003出土遺物実測図（1/4）

部分には小規模な溝が設置されており、畦畔西南がやや高く、北東部がやや低い状況から水掛り的な機能を有していたものと考えられる。尚、この畦畔の方向性と水田5でみられた水田岸部に直行する方向性を有する溝については、ほぼ重なるものであり、なんらかの影響を与えているものと考えられる。

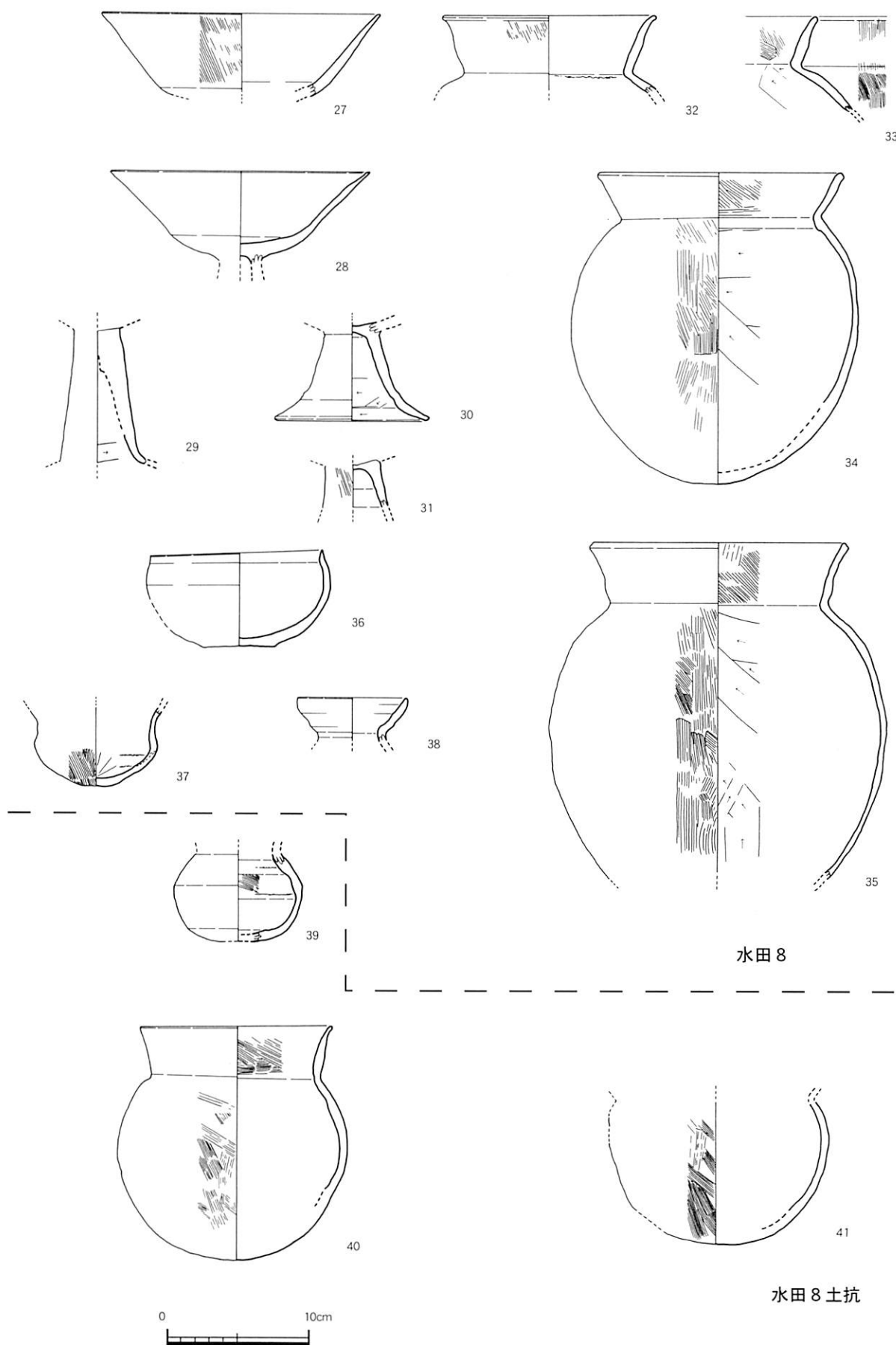
水田内土坑については、長軸1.0m、短軸0.8m、深さ0.7mを測る平面不整円形の土坑で、2段掘りの中位付近で2個体分の壺が重なる用に出土している。

出土遺物には、土師器壺・甕・高坏等がある。水田内土坑からは、土師器の壺が出土している。水田8の時期は、前述の遺物等から5世紀中頃～後半の位置づけを考えたい。





第17図 A区 SX020 (水田) 出土遺物実測図 (1/4) (1/2)



第18図 A区 SX020（水田）出土遺物実測図（1/4）

15はSX020(水田 5)の出土遺物である。15は須恵器坏身である。

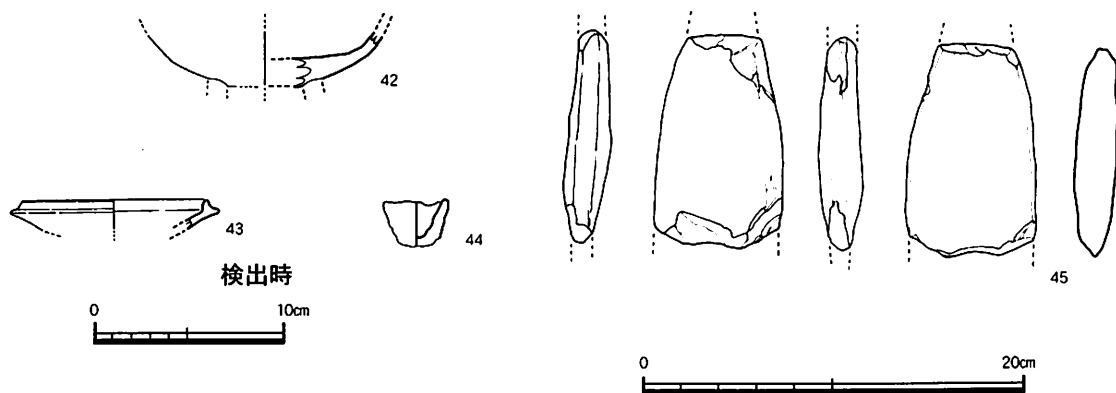
16～18はSX020(水田 6)の出土遺物である。16は土師器の小型壺である。17は須恵器坏身である。18は土師器高坏である。

19～26はSX020(水田 7)の出土遺物である。19・20は須恵器坏蓋である。20は復元口径14.2cm、器高4.5cmを測る。21～23は土師器壺である。21は直口壺の口縁部である。復元口径10.6cmを測る。22は崩れた二重口縁壺である。復元口径17.4cmを測る。23は段をもって外反する口縁の壺である。復元口径14.0cmを測る。24・25は土師器甕である。復元口径は、24で17.6cm、25で17.8cmを測る。25の内面にはヘラ削りが施される。26は土師器高坏である。脚部内面のヘラ削りは認められない。

27～35はSX020(水田 8)の出土遺物である。27～31は土師器高坏である。27は坏部口縁部の境に明瞭な稜線を有し、28は境の稜線が不明瞭なものである。復元口径は27で19.4cm、28で18.4cmを測る。29は円柱状の脚柱部に低平で大きく開く脚裾部を有する。30・31は、坏部の接合部から大きく開き脚裾部に至るものである。30の復元底径は11.0cmを測る。32・33は土師器壺である。口縁部の中位がやや厚く先端部で細くなり外反する。復元口径は32で14.8cmを測る。34・35は土師器甕である。内面はヘラ削りが施され、胴部の最大径は中位からやや上部に位置する。34は復元口径17.4cm、器高21.8cm、35は復元口径17.6cmを測る。36は土師器鉢である。平底の底部に、口縁端部が外反気味に直立する。口径12.2cm、器高7.0cm、底径5.0cmを測る。37・38は小型丸底壺である。38は復元口径7.8cmを測る。

39～41はSX020(水田 8)内土坑の出土遺物である。31は小型丸底壺である。40・41は小型の壺である。40は口径13.6cm、器高16.5cmを測る。

41～45は、検出時の出土遺物である。42は龍泉窯系青磁碗である。内面見込み部が露胎となる。43は須恵器坏身である。復元口径9.8cmを測る。44は土師器のミニチュア土器である。口径3.5cm、器高2.5cmを測る。45は緑泥片岩製の磨製石斧である。長軸5.5cm、刃部幅3.4cmを測る。



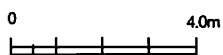
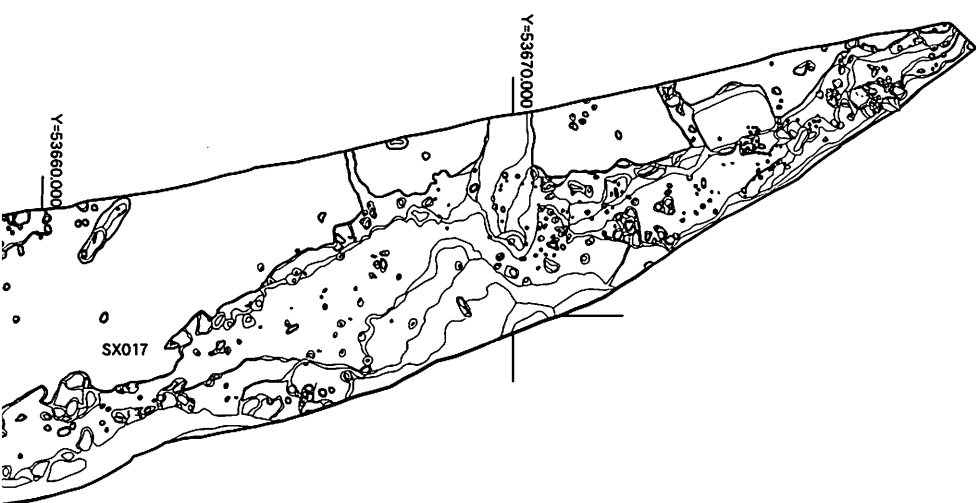
第19図 A区 検出時出土遺物実測図 (1/4) (1/2)

調査区	報告番号	出土遺構	種別	器種	口径	器高	底径	備 考	年 代	産地
A	1	SH003	弥生土器	甕	(20.6)				弥生時代後期前葉	
A	2	SH003	弥生土器	甕					弥生時代後期前葉	
A	3	SH003	弥生土器	甕	(21.4)				弥生時代後期前葉	
A	4	SH003	弥生土器	甕	(25.0)				弥生時代後期前葉	
A	5	SH003	弥生土器	台付鉢			(13.2)	赤色顔料が施される・脚部	弥生時代後期前葉	
A	6	SX020(水田2)	白磁	碗				V類	11世紀後半～12世紀前半	中国
A	7	SX020(水田2)	土師器	小皿			(6.6)	底部糸切り離し	12世紀代	在地
A	8	SX020(水田2)	土師器	坏			(8.2)	底部糸切り離し	12世紀代	在地
A	9	SX020(水田2)	石	石錘	7.7	7.5	1.7	長軸/短軸/厚さ		凝灰岩
A	10	SX020(水田3)	土師器	高台付坏			(7.2)		9世紀代	在地
A	11	SX020(洪水層)	須恵器	坏蓋					6世紀中頃～後半	
A	12	SX020(洪水層)	須恵器	坏身	(12.6)				6世紀末～7世紀初	
A	13	SX020(洪水層)	須恵器	壺	(11.6)					
A	14	SX020(洪水層)	須恵器	甕						
A	15	SX020(水田5)	須恵器	坏身					6世紀末～7世紀初	
A	16	SX020(水田6)	土師器	小型壺						
A	17	SX020(水田6)	須恵器	坏身					6世紀末～7世紀初	
A	18	SX020(水田6)	土師器	高坏						
A	19	SX020(水田7)	須恵器	坏蓋					6世紀中頃～後半	
A	20	SX020(水田7)	須恵器	坏蓋	(14.2)	4.5			6世紀中頃～後半	
A	21	SX020(水田7)	土師器	壺	(10.6)			直口壺	5世紀中頃～後半	
A	22	SX020(水田7)	土師器	壺	(17.4)			崩れた二重口縁	5世紀中頃～後半	
A	23	SX020(水田7)	土師器	壺	(14.0)			口縁部中位で段を有し外反する	5世紀中頃～後半	
A	24	SX020(水田7)	土師器	甕	(17.6)				5世紀中頃～後半	
A	25	SX020(水田7)	土師器	甕	(17.8)			内面へら削り	5世紀中頃～後半	
A	26	SX020(水田7)	土師器	高坏				脚内面のへら削り無し	5世紀中頃～後半	
A	27	SX020(水田8)	土師器	高坏	(19.4)				5世紀中頃～後半	
A	28	SX020(水田8)	土師器	高坏	(18.4)				5世紀中頃～後半	
A	29	SX020(水田8)	土師器	高坏					5世紀中頃～後半	
A	30	SX020(水田8)	土師器	高坏			(11.0)		5世紀中頃～後半	
A	31	SX020(水田8)	土師器	高坏					5世紀中頃～後半	
A	32	SX020(水田8)	土師器		(14.8)				5世紀中頃～後半	
A	33	SX020(水田8)	土師器						5世紀中頃～後半	
A	34	SX020(水田8)	土師器		(17.4)	21.8			5世紀中頃～後半	
A	35	SX020(水田8)	土師器		(17.6)				5世紀中頃～後半	
A	36	SX020(水田8)	土師器	鉢	12.2	7	5		5世紀中頃～後半	
A	37	SX020(水田8)	土師器	小型丸底壺					5世紀中頃～後半	
A	38	SX020(水田8)	土師器	小型丸底壺	(7.8)				5世紀中頃～後半	
A	39	SX020(水田8内土坑)	土師器	小型丸底壺					5世紀中頃～後半	
A	40	SX020(水田8内土坑)	土師器	小型壺	13.6	16.5			5世紀中頃～後半	
A	41	SX020(水田8内土坑)	土師器	小型壺					5世紀中頃～後半	
A	42	検出時	青磁	碗				龍泉窯/見込み部露胎	15世紀	中国
A	43	検出時	須恵器	坏身	(9.8)				6世紀末～7世紀初	
A	44	検出時	土師器	ミニチュア埴	3.5	2.5			5世紀中頃	
A	45	検出時	石	斧	5.5	3.4	1.2	磨製石斧・長軸/短軸/	弥生時代	

表1 A区出土遺物観察表



第20図 B区遺構全体図1 (1/160)



#### 4. B区の調査（遺構）

B区の調査では、竪穴住居(SH005・013)、溝跡(SD001他)、不明遺構(SX012・014・016)水田の耕作痕跡と考えられる床面に凹凸を有する遺構(SX017・020・021)、小穴等が検出されている。

##### 竪穴住居(SH)

竪穴住居はSH005・013の2棟検出されている。いずれも調査区西側で検出されている。

##### SH013(第21図)

調査区の北西端部に近い位置で住居の北半部が調査区外に延びる形で確認される。住居の南面で、3.0mを測る平面方形の竪穴住居で、2本の支柱穴を有する。検出面から床面の深さは0.15m前後を測り、残りは良いとは言えない。幅0.1m、深さ0.05mの壁溝が一部とぎれながらも住居をほぼ全周する。住居の中央部には2本の支柱穴に挟まれる形で、径0.45m、深さ0.1mを測る平面円形の床面が被熱した浅い掘り込みを有する炉が存在する。加えて住居の南面の中央部には埋土に炭化物や焼土等が観察される長軸0.65m、短軸0.5m、深さ0.5mを測る平面楕円形の土坑が検出されている。この南面土坑を挟むように長さ0.70～0.75m、幅0.05～0.1m、深さ0.1～0.2mを測る溝状の遺構が配置されている。

2本の支柱穴は、柱間は0.75mを測り、柱穴の平面形は、円形～不整円形を呈する。柱穴径は、0.2m～0.25m、深さは0.1m～0.3mを測る。

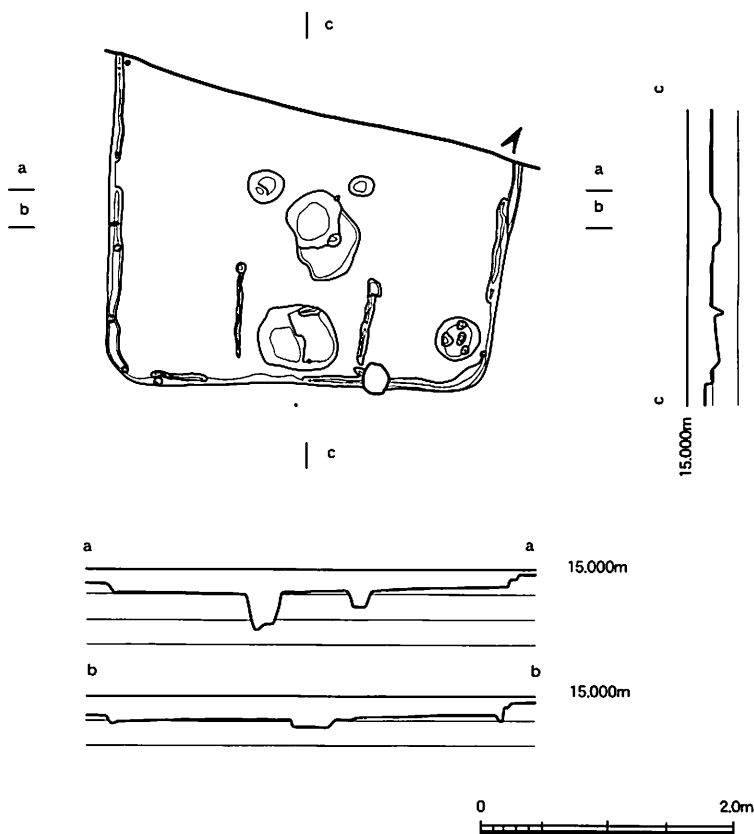
出土遺物には、土師器甕、高坏等があり、5世紀中頃に位置づけられるものと考えられる。

##### SH005

調査区北西部で検出される。住居の南面及び北面で6.5m、東面で5.2mを測り、6.3mを測る西面中央部には幅2.2m、奥行き1.2mの張り出し部を有する。住居跡の平面形態については、この張り出し部を有する西面部が台形状に広がる特徴を有し、支柱穴は4本である。検出面からの深さは、0.05～0.1mを測り、残りは良いとは言えない。幅0.1～0.25m、深さ0.1～0.2mの壁溝が張り出し部も含める形でほぼ全周している。住居跡の中央部には長軸0.8m、短軸0.45m、深さ0.05mを測る平面楕円形の床面がやや被熱した浅い掘り込みを有する炉が存在する。住居の南面の中央部には埋土に炭化物や焼土等が観察される長軸0.8m、短軸0.5m、深さ0.2mを測る平面楕円形の土坑が検出されている。更にSH013同様、この南面土坑を挟むように長さ0.5～1.4m、幅0.05～0.1m、深さ0.1～0.3mを測る溝状の遺構が配置されている。

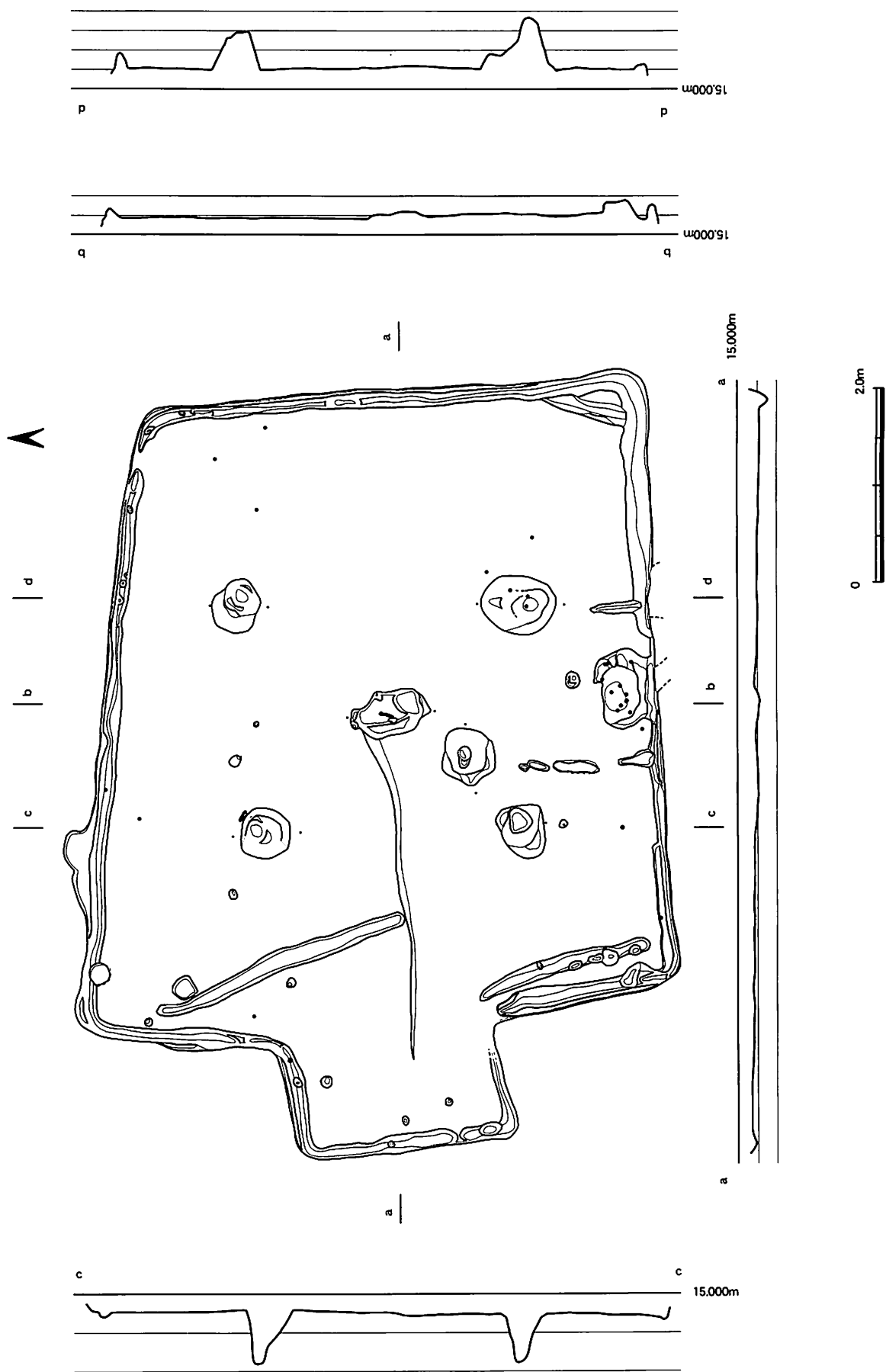
4本の支柱穴は、中心の炉を囲むように2.2×2.8mの平面長方形に配置され、柱穴の平面形は平面円形～長円形を呈し、柱穴径は0.5～0.8m、深さは0.4～0.6mを測る。

出土遺物には、土師器高坏、壺、小型丸底壺、甕がある。出土状況的には、平面図のドットに示されたよう南面土坑に

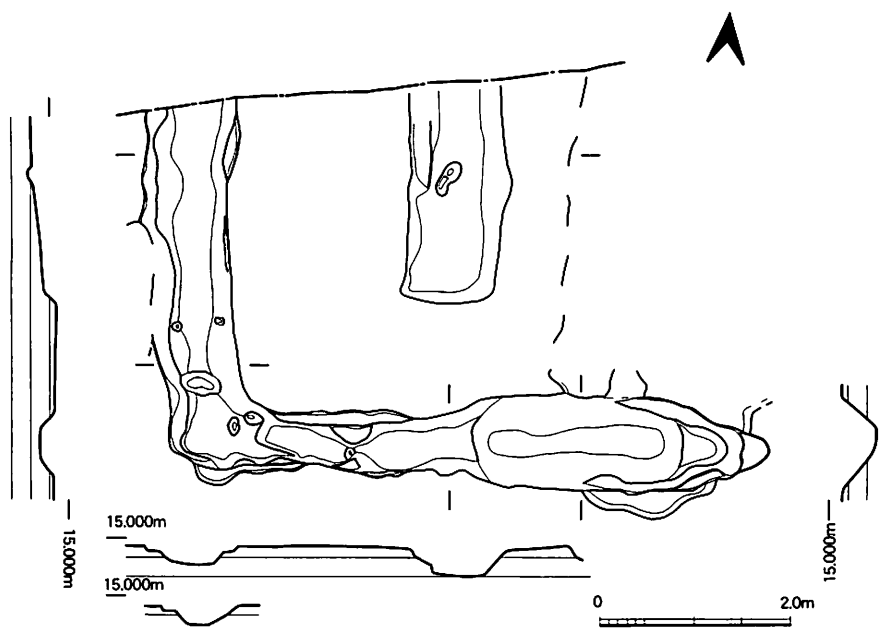


第21図 B区 SH013遺 構実測図 (1/60)





第22図 B区 SH005 遺構実測図 (1/60)



第23図B区 SX014・016 遺構実測図 (1/80)

その集中が確認されており、遺物内容的には高杯の量の多さが目に付く。SH013 同様、5世紀中頃に位置づけられるものと考えられる。

溝跡(SD)

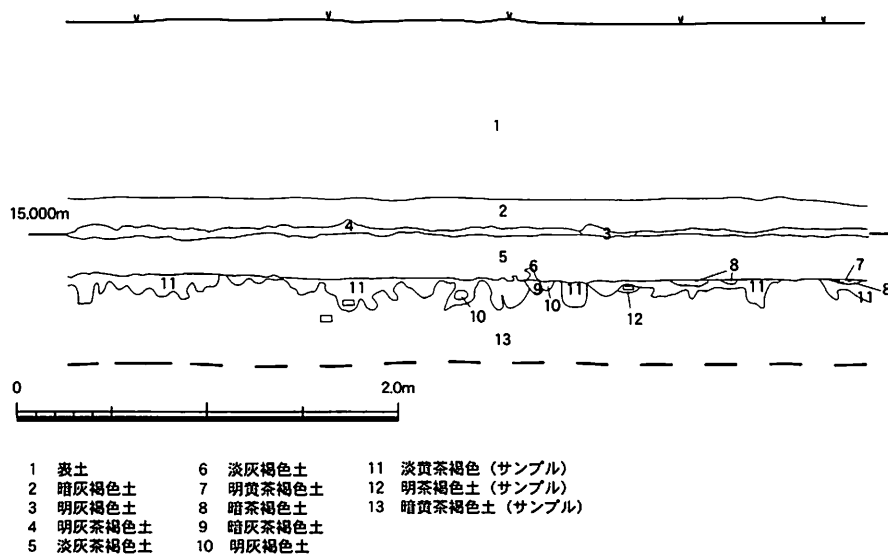
SD001

調査区南端部に添って東西方向に延びる溝である。溝の南肩が調査区外となるため幅は不明、深さは0.3～0.8mを測る。現水路はこの溝を踏襲する形で作られている。

出土遺物には、唐津陶器皿、肥前磁器小坏、碗、備前焼播鉢、甕等に加え、須恵器蓋、土師器甕等古代の混入遺物も視られる。出土陶磁器の時代幅及び掘り返しの認められる土層観察結果等から中世末～近世(幕末)までの幅広い期間の溝であることが考えられる。

不明遺構 (SX)

不明遺構には、溝状の遺構が組み合わせによる性格不明遺構(SX012・014・016)及び、水田の耕作痕跡と考えられる床面に凹凸を有する遺構(SX017・020・021)の2種が存在する。



第24図 B区 北壁土層断面図 (1/40)

SX012

調査区中央やや西よりで検出される。長さ3.6m、幅0.65m、深さ0.25mを測る溝と土坑の中間的な形態を呈する遺構である。SX014との切合いから新しく位置づけられる遺構である。

出土遺物には弥生土器甕、鉢の脚部がある。弥生時代のものと考えられる。

SX014・016(第23図)

調査区中央やや西よりで検出される。幅0.6～1.0m、深さ0.2～0.4mを測る「L」字状に屈曲する溝であるSX014と、南北方向に延びる幅0.9～1.0m、深さ0.2～0.3mを測る溝であるSX016の組み合わせによる遺構である。一見方形周溝墓状を呈する平面分布であるが、調査区北壁断面のSX016土層部分の観察から溝であるとの見解を得たため、溝状の遺構が組み合わせによる性格不明遺構としている。

出土遺物には弥生土器甕がある。弥生時代のものと考えられる。

SX017・020・021

調査区中央やや西より、調査区東端部に至る範囲で確認されている。水田の耕作痕跡と考えられる床面に凹凸を有する遺構で、幅、深さ共に不定である。

出土遺物には土師の土錘、弥生土器壺、鉢、甕、縄文晩期末(弥生時代早期)鉢等が混在する。

## 5. B区の調査(遺物)

46～49はSH013の出土遺物である。46・47は土師器高坏である。共に坏部と口縁部の境界部分の破片となる。48・49は土師器甕である。48は復元口径16.0cmを測り、49は14.4cmを測る。

50～62はSH005の出土遺物である。50～56は土師器高坏である。50・51・55は坏部～口縁部にかけての資料である。復元口径は、50で、21.2cm、51で18.2cm、55で17.6cmを測る。口縁部は、ほぼ直線的に立ち上がる50・55と、外反気味に立ち上がる51がある。坏部口縁部の境に不明瞭な稜線が入る。52・53は底部の一部を欠く又はほぼ完形の資料である。法量は52で、口径18.4cm、器高12.9cm、底径11.8cm、53で口径18.0cmを測る。坏部口縁部の境に不明瞭な稜線が入る。円柱状の脚柱部に低平で大きく開く脚裾部を有し、脚部内面にはていねいなヘラ削りが施される。坏部と口縁部の境は不明瞭な稜線が入る。54・56は脚裾部の資料である。54は、低平状に開く脚裾部のもので、復元底径11.6cm、内面にはヘラ削りが施される。56は坏部との接合部に近い資料となる。57・58は小型の壺である。51は復元口径18.2cm、58は、口径14.8cmを測る。59・60は小型丸底壺である。61・62は土師器甕である。共に内面にはヘラ削りが施され、胴部の最大径は中位にある。法量は61で、復元口径16.4cmを測る。

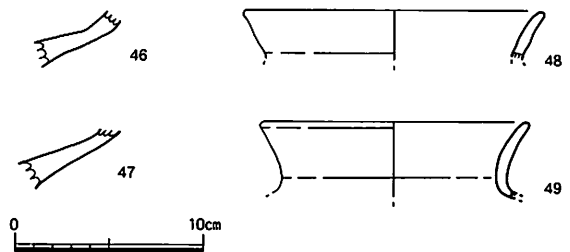
63・64はSX012の出土遺物である。63は弥生土器甕の底部である。平底の底部で、復元底径6.8cmを測る。64は脚付鉢の脚部で、復元底径16.0cmを測る。

65はSX014の出土遺物である。65は弥生土器甕で、頸部から肩部の破片資料となる。

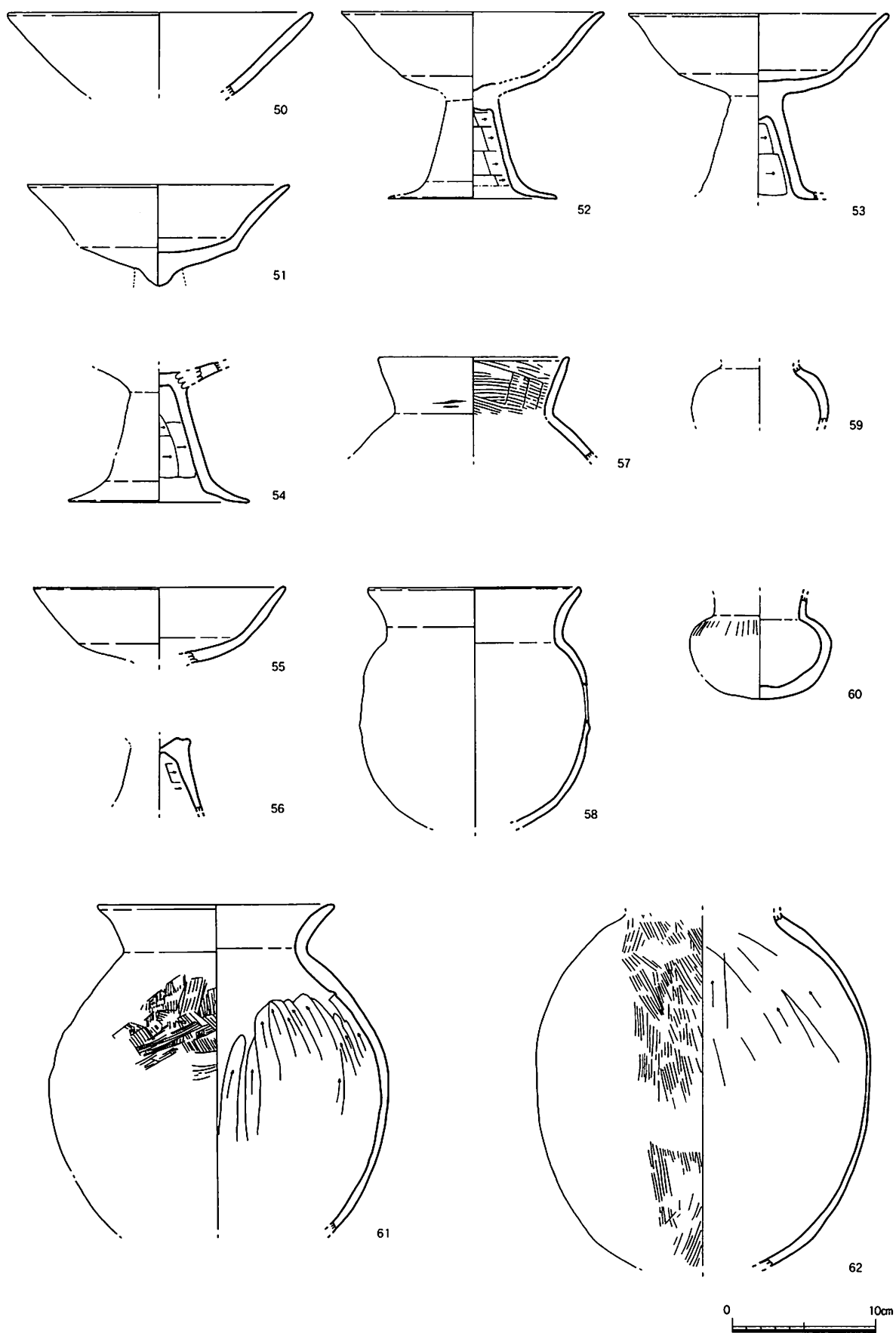
66はSX019の出土遺物である。66は弥生土器壺で、頸部から肩部の資料で、断面三角形の2条の突帯が巡り、縦方向の浮文が貼り付けられる。

67～72はSX017の出土遺物である。67は弥生土器壺である。複合口縁壺で、櫛描波状文が施される。復元口径16.0cmを測る。68は弥生土器鉢である。復元口径6.4cm

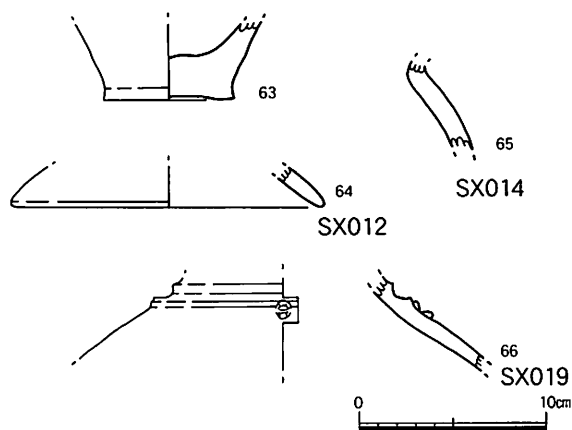
を測る。69は弥生土器小型の壺である。胴部に断面四角形を呈する突帯が巡る。70～72は弥生土器甕である。70・71は頸部から胴部にかけての資料で、72は、底部の資料である。法量は、72で底径8.8cmを測る。73～78は縄文晩期末(弥生時代早期)の鉢である。73は、変形浅鉢である。74・75・77・78は深鉢で、刻目を有する突帯が巡る。76は浅鉢である。



第25図 B区 SH013 出土遺物実測図(1/4)



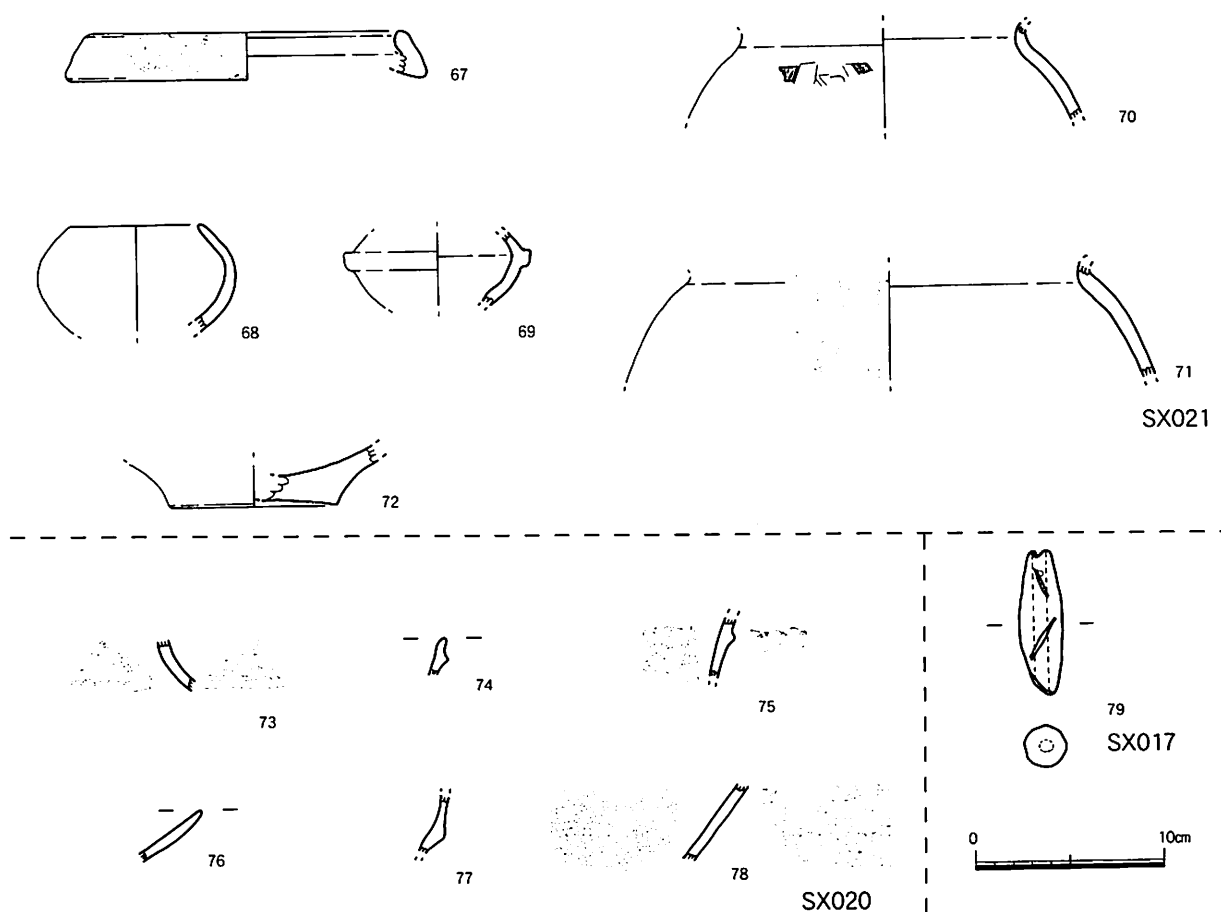
第26図 B区 SH05 出土遺物実測図 (1/4)



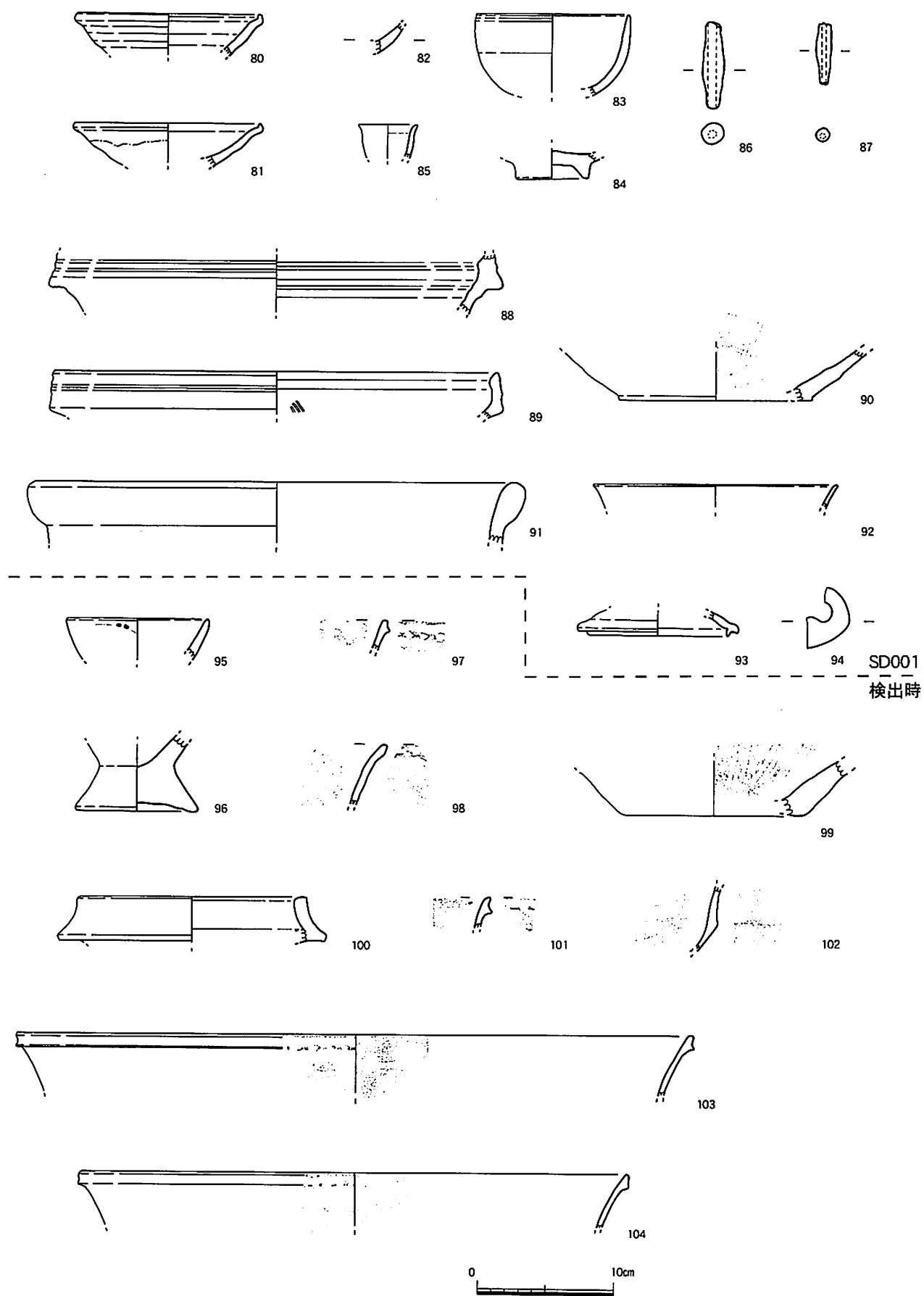
第27図 B区 SO14・019 出土遺物実測図 (1/4)

80～94はSD001の出土遺物である。80～84は肥前陶器である。80・81・82は砂目段階の溝縁皿である。復元口径は80で、13.4cm、81で13.4cmを測る。83・84は京焼風陶器碗である。法量は83で、復元口径11.2cmを測り、84で高台形5.2cmを測る。85は、肥前磁器の小坏である。復元口径6.5cmを測る。86・87は土師器土錘である。88～91は備前焼である。88～90は播鉢である。88・89は口縁部の資料で、89は復元口径62.2cmを測る。90は底部の資料で5～6本単位の播目が確認出来る。復元底径14.0cmを測る。91は甕である。やや外反気味に立ち上がる玉縁の口縁部で、復元口径35.4cmを測る。92は、太宰府分類のV類にあたる白磁碗である。復元口径17.6cmを測る。93は須恵器の坏蓋である。復元口径10.0cmを測る。94は土師器甕の取っ手部分である。

95～104は検出時の出土遺物である。95は肥前磁器碗である。くらわんか手のもので、復元口径10.2cmを測る。96は弥生土器甕である。底径8.8cmを測る。97・98は縄文晩期末(弥生時代早期)の深鉢で、刻目を有する突帯が巡る。99は肥前陶器播鉢である。底径12.8cmを測る。100は弥生土器の壺口縁部で、複合口縁を呈する。101～104は、縄文晩期末(弥生時代早期)の深鉢で、刻目を有する突帯が巡る。法量は、103で、復元口径49.0cm、104で39.4cmを測る。



第28図 B区 SX017・020・021出土遺物実測図 (1/4)



第29図 B区 SD001・検出時 出土遺物実測図 (1/4)

調査区	報告番号	出土遺構	種別	器種	口径	器高	底径	備 考	年 代	産地
B	46	SH013	土師器	高坏				口縁部と坏部の境界	5世紀中頃	
B	47	SH013	土師器	高坏				口縁部と坏部の境界	5世紀中頃	
B	48	SH013	土師器	甕	(16.0)				5世紀中頃	
B	49	SH013	土師器	甕	(14.4)				5世紀中頃	
B	50	SH005	土師器	高坏	(21.2)			直線的に立ち上がる口縁部	5世紀中頃	
B	51	SH005	土師器	高坏	(18.2)			坏部口縁部の境に不明瞭な稜線	5世紀中頃	
B	52	SH005	土師器	高坏	(18.4)	12.9	(11.8)	坏部口縁部の境に不明瞭な稜線	5世紀中頃	
B	53	SH005	土師器	高坏	(18.0)			坏部口縁部の境に不明瞭な稜線	5世紀中頃	
B	54	SH005	土師器	高坏			(11.6)	脚柱部下端から裾部へ大きく開く	5世紀中頃	
B	55	SH005	土師器	高坏	(17.6)			坏部口縁部の境に不明瞭な稜線	5世紀中頃	
B	56	SH005	土師器	高坏				内面ヘラ削り	5世紀中頃	
B	57	SH005	土師器	小型壺	(13.0)				5世紀中頃	
B	58	SH005	土師器	小型壺	(14.8)				5世紀中頃	
B	59	SH005	土師器	小型丸底壺					5世紀中頃	
B	60	SH005	土師器	小型丸底壺					5世紀中頃	
B	61	SH005	土師器	甕	(16.4)			胴部の最大径は中位	5世紀中頃	
B	62	SH005	須恵器	甕				胴部の最大径は中位	5世紀中頃	
B	63	SX012	弥生土器	甕			(6.8)	やや上げ底風	弥生時代中期後葉	
B	64	SX012	弥生土器	脚付鉢			(16.0)	脚部	弥生時代中期後葉	
B	65	SX014	弥生土器	甕				頸部～肩	弥生時代中期後葉	
B	66	SX019	弥生土器	壺				頸部に2条の突帯	弥生時代中期後葉	
B	67	SX021	弥生土器	壺	(16.0)			複合口縁壺・櫛描波状文	弥生時代後期中葉	
B	68	SX021	弥生土器	鉢	(6.4)				弥生時代後期中葉	
B	69	SX021	弥生土器	壺					弥生時代後期中葉	
B	70	SX021	弥生土器	甕					弥生時代後期中葉	
B	71	SX021	弥生土器	甕					弥生時代後期中葉	
B	72	SX021	弥生土器	鉢			(8.8)		弥生時代後期中葉	
B	73	SX020	縄文土器	変形浅鉢					晩期末（弥生早期）	
B	74	SX020	縄文土器	深鉢				刻み目突帯	晩期末（弥生早期）	
B	75	SX020	縄文土器	深鉢				刻み目突帯	晩期末（弥生早期）	
B	76	SX020	縄文土器	浅鉢					晩期末（弥生早期）	
B	77	SX020	縄文土器	深鉢					晩期末（弥生早期）	
B	78	SX020	縄文土器	深鉢					晩期末（弥生早期）	
B	79	SX017	土師器	皿	7.8	2.2		長さ/最大径		
B	80	SD001	陶器	皿	(13.4)			砂目積み段階	1610～1630	肥前
B	81	SD001	陶器	皿	(13.4)			砂目積み段階	1610～1630	肥前
B	82	SD001	陶器	皿				砂目積み段階	1610～1630	肥前
B	83	SD001	陶器	碗	(11.2)			京焼風陶器	1690～1680	肥前
B	84	SD001	陶器	碗			(5.2)	京焼風陶器	1690～1680	肥前
B	85	SD001	染付	小坏	(4.3)				1680～1740	肥前
B	86	SD001	土師器	土鍾	6.5	1.5		長さ/最大径		
B	87	SD001	土師器	土鍾						
B	88	SD001	陶器	擂鉢				乗岡編年近世1期	16世紀末	備前
B	89	SD001	陶器	擂鉢	(32.2)			乗岡編年近世1期	16世紀末	備前
B	90	SD001	陶器	擂鉢			(14.0)	乗岡編年近世1期	16世紀末	備前

表2 B区出土遺物観察表

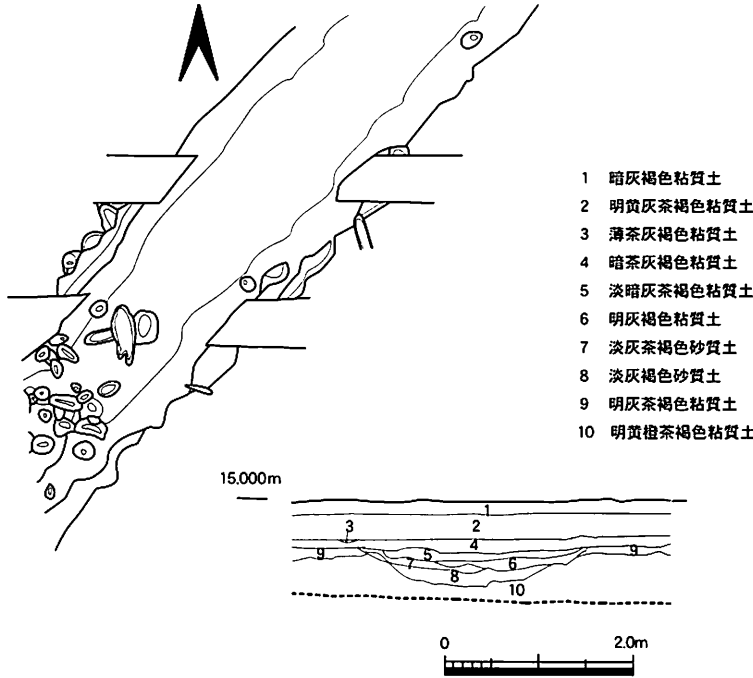


6. C区の調査（遺構）

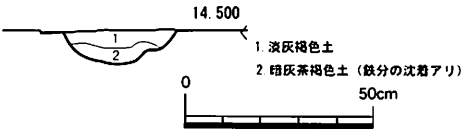
C区の調査では、水田遺構(SX001・005・008)、溝跡(SD002・009)が検出されている。

水田跡（SX）

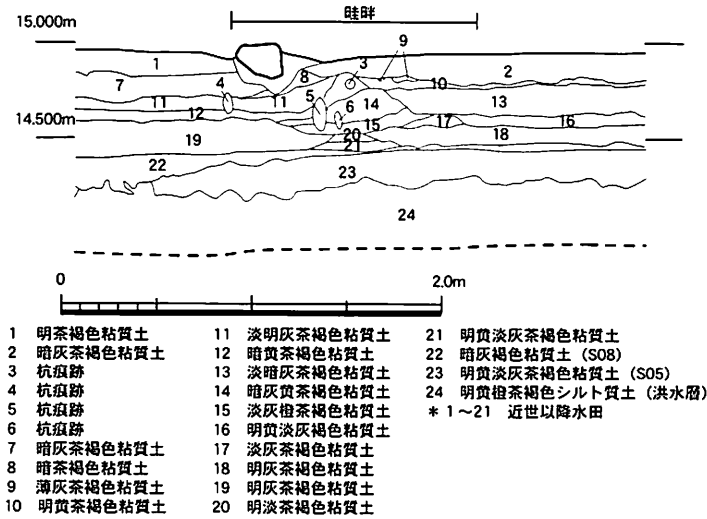
水田跡は、大きく新旧2段階で検出されており、新しい段階のものについては、調査区中央やや西より存在する南北方向の大畦畔を境に、西側にSX001,東側にSX005が検出されており、古い段階のものについては、この大畦畔を境界とはせずに調査区のほぼ全域にわたって検出されているSX008となる。



第30図C区 SD002 遺構実測図（1/80）



第31図C区 SD009 土層断面図（1/40）



第32図 C区 大畦畔土層断面図（1/40）

#### SX001(第34図)

調査区西端部に広がる水田層である。本来であれば、大畦畔を境に一段高い位置にある水田として西側全体に広がりを見せる状況であったと考えられるが、大畦畔付近の高い部分は、上面を後世の水田により削平された状況である。一部、調査区北西隅のSD002の上面を覆う状況が確認されておりSD002より新しい位置づけとなる。

SX001の時期は、SX005と同時期に位置づけたい。

#### SX005(第34図)

調査区中央から東側に広がる水田層である。大畦畔を境に一段低い位置にある水田であり、全体にその残りは良好である。

SX005の出土遺物には土製のフイゴ羽口がある。

SX005の時期は、SX005を切る形で攪乱遺構SX006があるが、その出土遺物の中にSX005から掻き上げたと考えられる土師器坏があるが、この年代観より中世後半期に位置づけたい。

なお、SX001・005共に点線で表現された線があるが、両水田遺構の耕作土掘削の際にやや高く盛り上がった状況や、他部分の耕作土との比較において黄褐色土ブロックが多く認められる部分の確認された。SX001及びSX005の前段階に位置づけられる、水田の畦畔(小畦畔)の痕跡と考え記録し、点線での表記をしている。他遺構との関連では、後述するSD002の上層段階と併存関係にあると考えられる。

#### SX008 (第35図)

大畦畔に規制されない水田であり、調査区全体に広がる。他遺構との関連では、やはり後述するSD002下層段階と併存関係にあると考えられる。加えて、SX001・005と同様、点線により表現されているが、SX008の前段階に位置づけられる、水田の畦畔(小畦畔)の痕跡が確認されている。他遺構との関連では、後述するSD009と併存関係にあると考えられる。

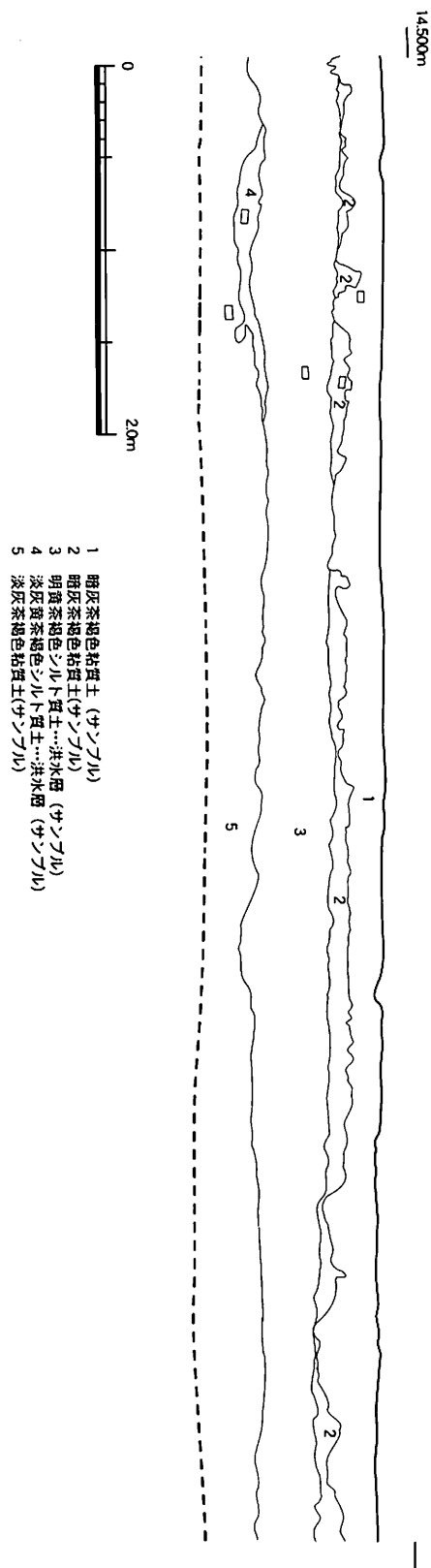
SX008の出土遺物には、土師器高台付坏、蓋、坏、弥生土器甕・壺、縄文土器深鉢等があるが、そのほとんどが掻き上げられたものである。

SX008の時期は、小片の出土遺物及びSD002の年代観から中世前半期に位置づけたい。

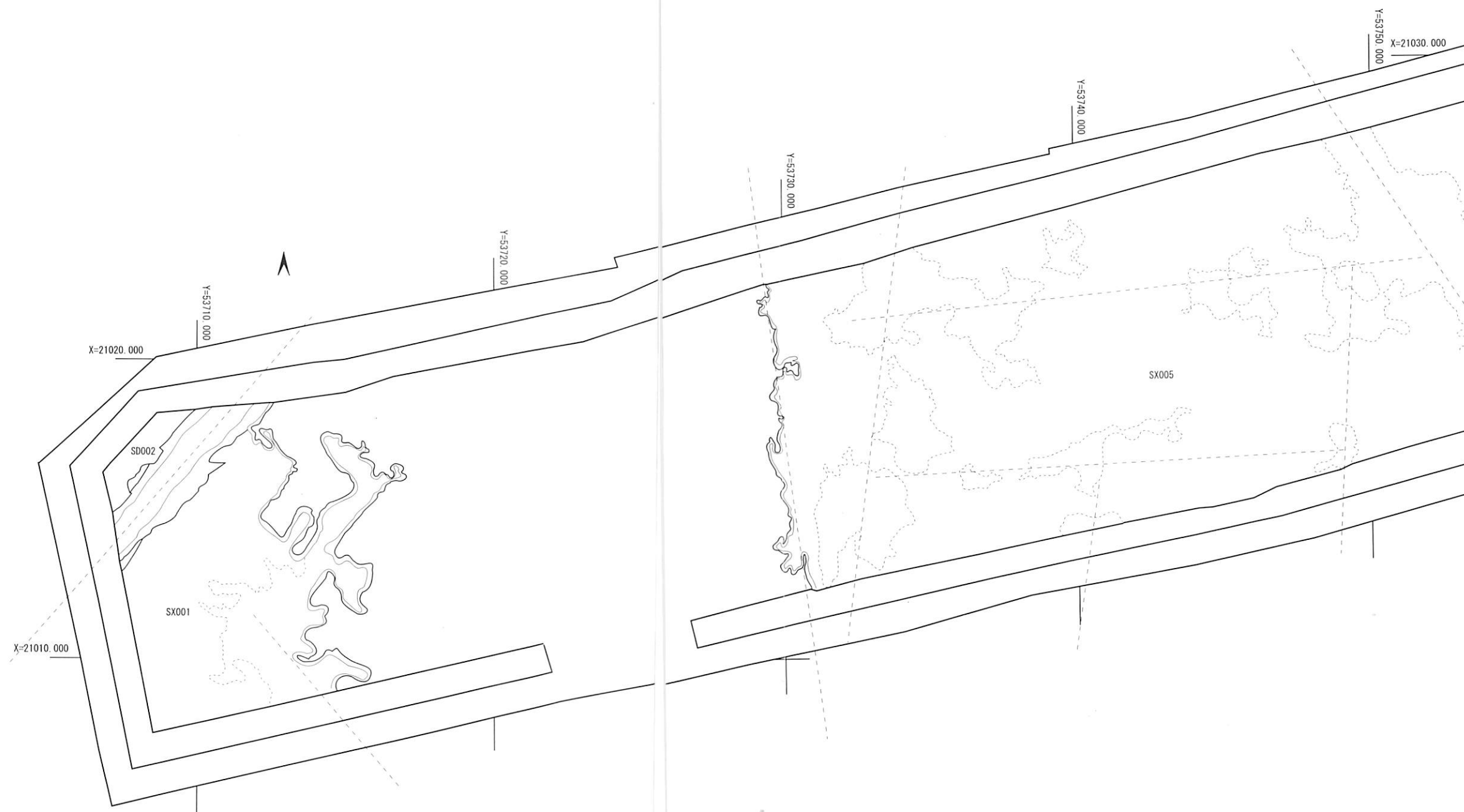
#### 大畦畔(第32図)

調査区中央やや西よりの位置で検出された南北方向の畦畔で、この畦畔を境に西側が高く、東側が低い水田となっている。SX001・005の段階から現在に至る期間何度も造り直すかたちで形成された畦畔である。尚、SX005の段階ではこの畦畔は確認されていない。現在当地で復元されている条里状の地割りの方向と一致するものであり、注目される。

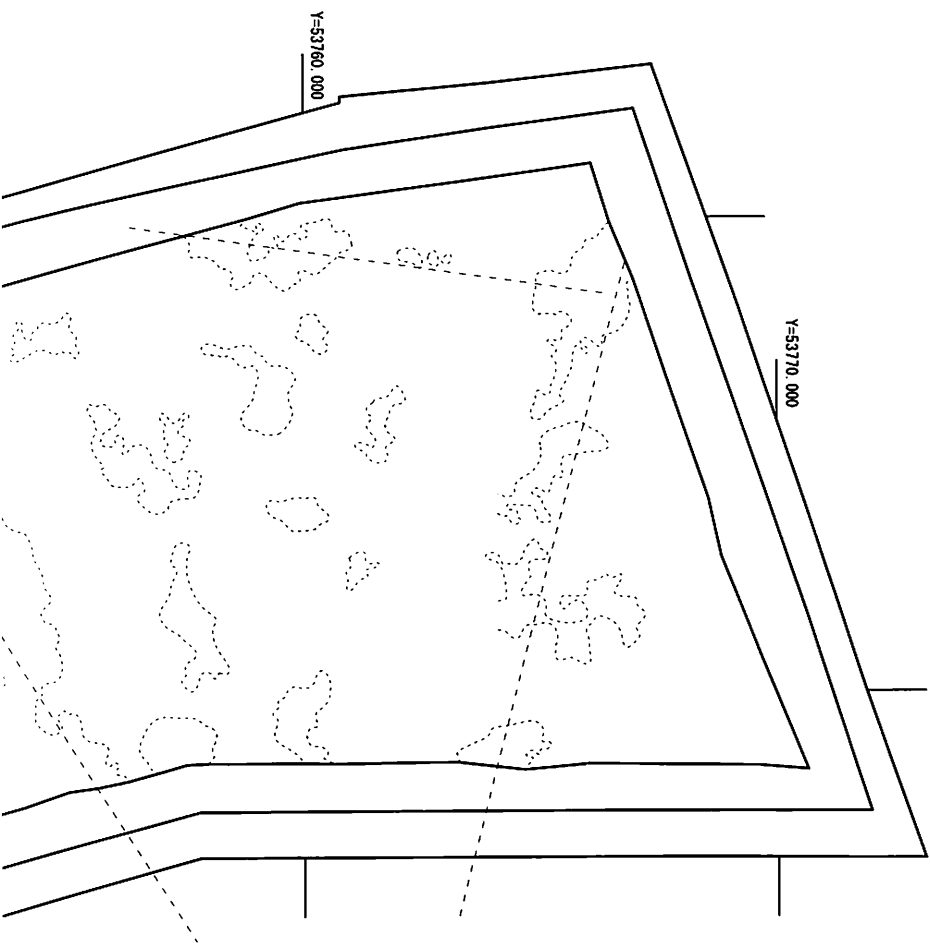
その他水田遺構の可能性(第33図)

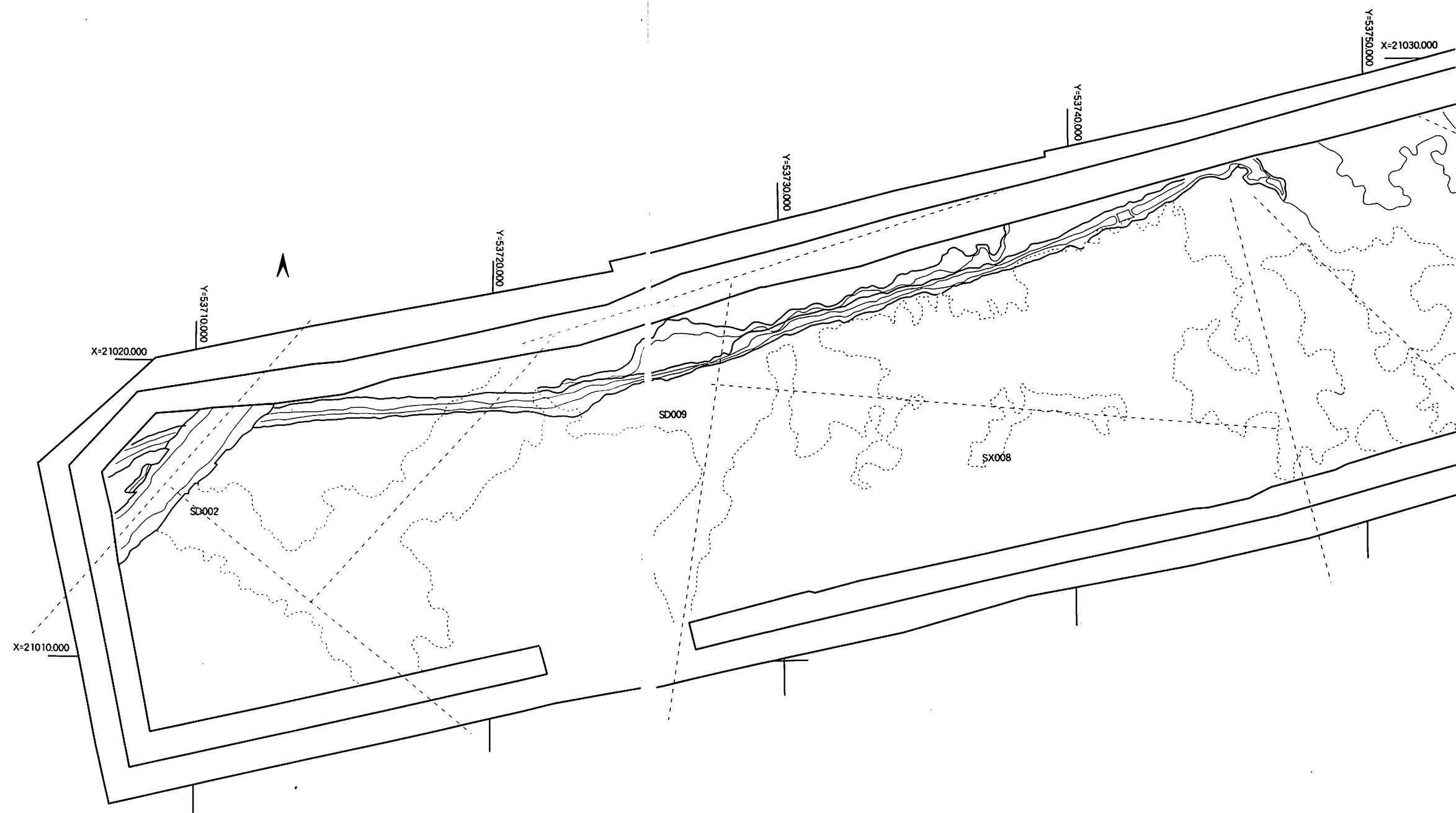


第33図 C区 東壁土層断面図 (1/40)

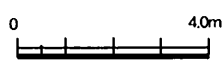
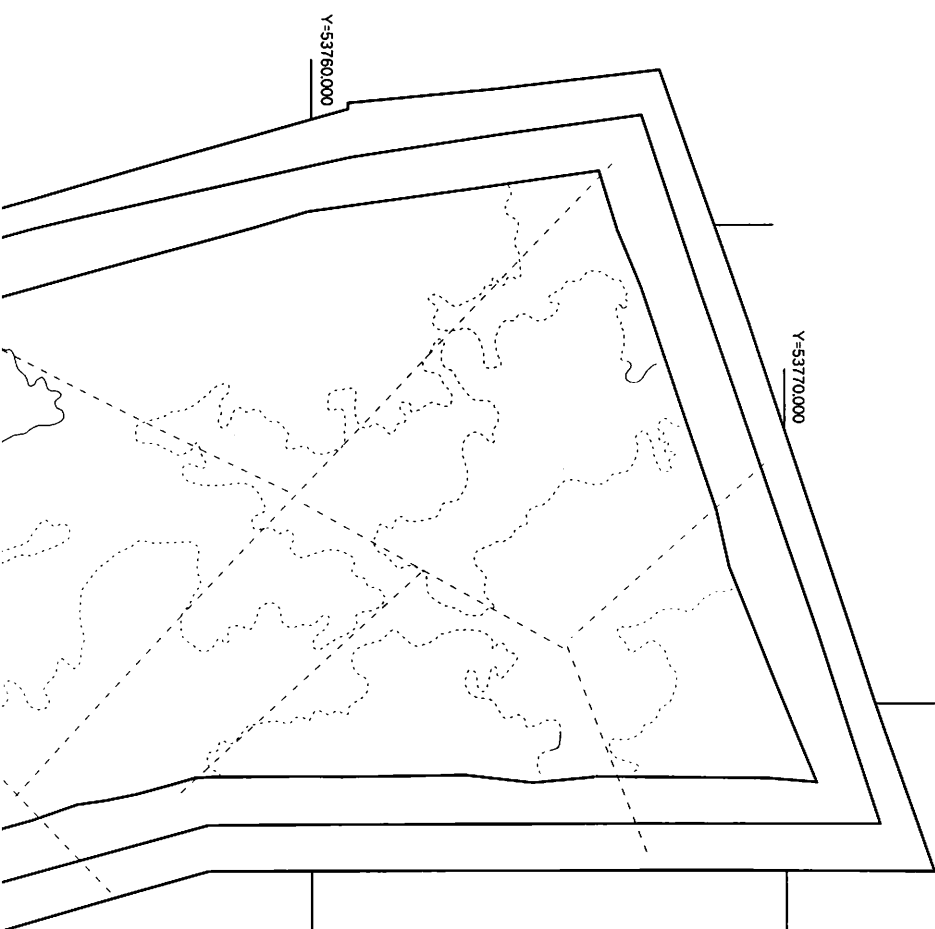


第34図 C区遺構全体図1 (1/60)





第35図 C区遺構全体図2 (1/160)



その他SX008の下層、調査段階の所見ではその土層及び平面観察で洪水層としたシルト質土(第3・4層)であったが、後述するIV章自然科学的分析(植物珪酸体分析)の結果、稲のプラントオパールが確認されており、水田遺構の可能性を残した。

溝跡(SD)

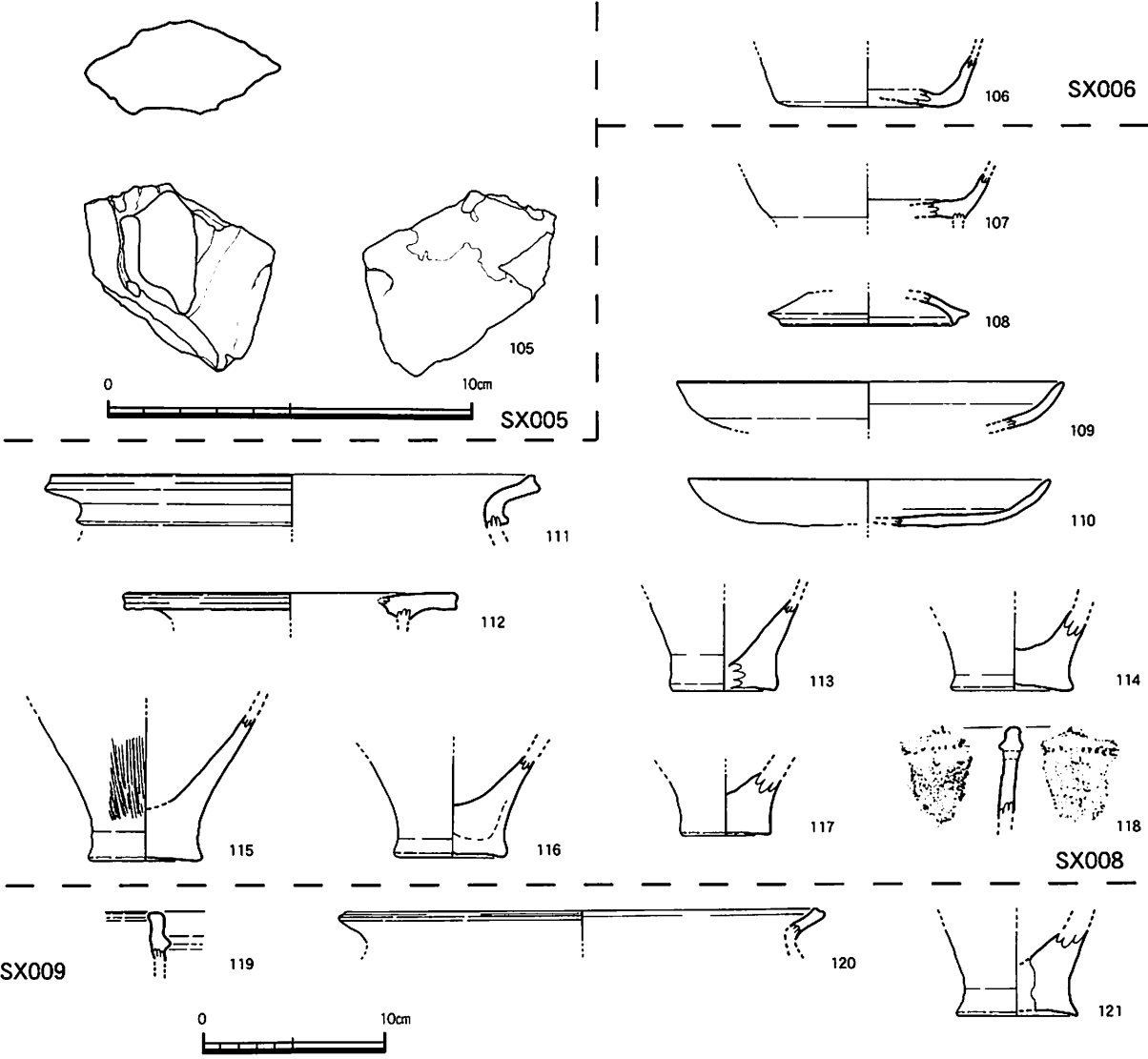
溝跡は2条(SD002・009)検出されている。

SD002(第30図)

幅2.0m、深さ0.4mを測る溝である。調査区北西隅を南西から北東へななめに横切る形で、検出されている。その切合いからSD001より新しく位置づけられる。土層の観察からその下層(7・8層)付近に砂層が観察されることから、洪水等により一度埋没し、掘り返しを行い再度使用されている可能性が考えられる。洪水後がSX001及びSX005の前段階に、洪水前がSX008後段階と併存するものと考えられる。及びSX001出土遺物は小片のみで、時期を判断する材料は少ないがその表面観察等から概ね中世前半期に位置づけられるものと考えられる。

SD009 (第31図)

幅0.6m、深さ0.2mを測る溝である。調査区北西隅から調査区北辺に沿う形で東に延びる。その切合いからSD002より古く位置づけられる。



第36図 C区 出土遺物実測図 (1/4・1/2)

出土遺物は弥生土器甕があるが、これらは掻き上げられた遺物と考えられ、その他は小片のみで時期を判断する材料は少ない。SX008前段階と併存するもの位置づけを考えたい。

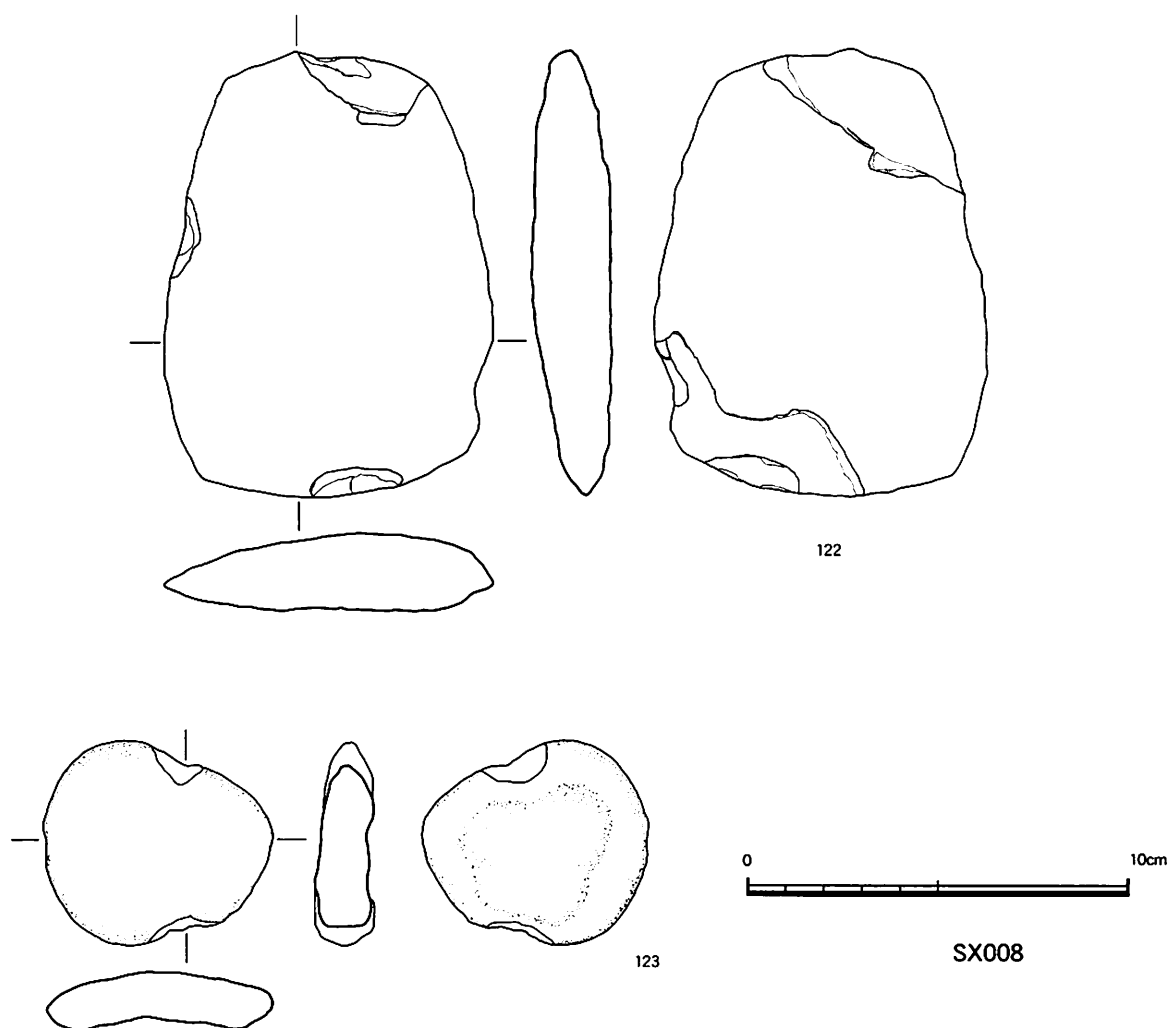
## 7. C区の調査(遺物)

105は、SD005の出土遺物である。土製のフイゴ羽口である。内径4.2cmを測る。

106は、SX006(かく乱)の出土遺物である。復元底径10.0cm、底部糸切り離しの土師器の坏である。

107～118・122・123は、SX008の出土遺物である。107は土師器の高台付坏である。108は土師器蓋である。復元口径11.0cmを測る。109・110は土師器坏である。回転台手法によらないもので、内面の暗文については表面の状態が悪く確認出来ない。口縁端部の内外面に見られる沈線は認められない。復元口径は109で、20.0cm、110で21.4cmを測る。111～117は弥生土器甕である。111は跳ね上げ口縁の甕である。頸部に断面三角形の突帯が巡る。復元口径26.6cmを測る。112は鋤先状の口縁部を有する壺である。復元口径18.4cmを測る。113～117は甕の底部である。平底～やや上底風のもので、底径は、113で6.0cm、114で、6.7cm、115で、6.2cm、116で6.2cm、117で5.0cmを測る。118は縄文土器深鉢である。波状口縁の波頂部にあたり、刻目を有する突帯と穿孔が施される。122・123は石器である。共に凝灰岩製の石錘で、それぞれ2ヶ所ないし3ヶ所に凹状の加工が施されている。

119～121はSD009の出土遺物である。119は甕である。口縁部下に突帯が巡る。120は跳ね上げ口縁の甕である。復元口径27.0cmを測る。121は甕の底部である。やや上げ底風のもので、復元底径6.6cmを測る。



第37図 C区 出土遺物実測図2 (1/2)



8. D区の調査(遺構)

D区の調査では、水田遺構(SX001・002・003・004)が検出されている。

水田遺構(SX)

水田遺構は、大きく新旧2段階で検出されており、新しい段階のものについては、調査区中央やや東よりの南北方向の畦状の高まり(小畦畔)を境に、西側にSX001、東南にSX002、東北にSX003が検出されており、古い段階のものについては、この小畦畔を境界とはせずに調査区のほぼ全域にわたって検出されているSX004となる。

SX001(第38図)

調査区西側に広がる水田層である。その床面には耕作痕跡と思われる凸凹面が見られる。出土遺物には底部糸切り離しの土師器坏がある。

SX001の時期は、その出土遺物から中世後半期に位置づけたい。

SX002 (第38図)

調査区東南に広がる水田層である。その床面には耕作痕跡と思われる凸凹面が見られる。

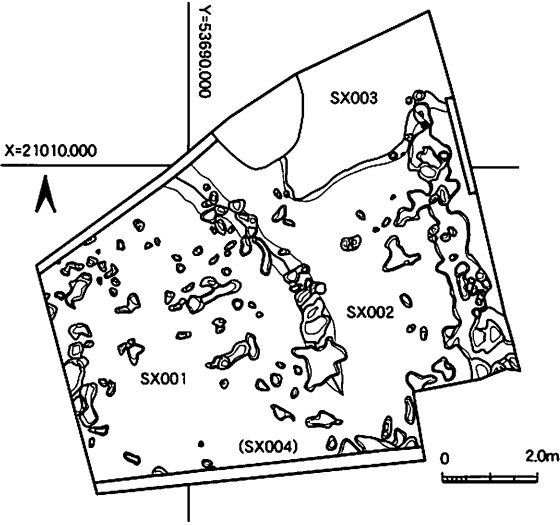
SX003 (第38図)

調査区東北に広がる水田層である。その床面には耕作痕跡と思われる凸凹面が見られる。

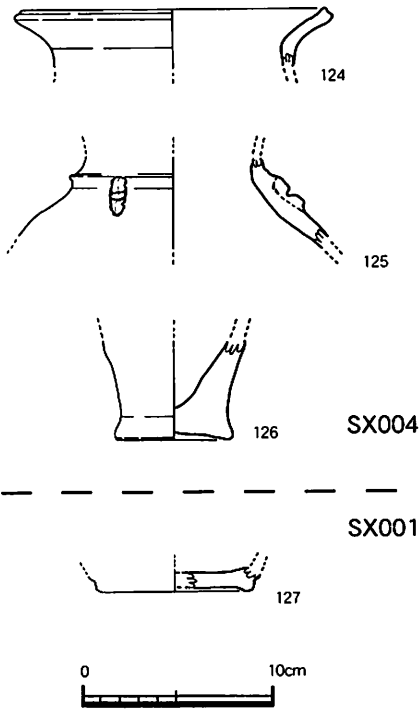
SX004(第38図)

古い段階のもので、この小畦畔を境界とはせずに調査区のほぼ全域にわたって検出されている。出土遺物には弥生土器壺、甕があるが、これらは、掻き上げられた遺物である。

SX004の時期は、C区SX008と同様の時期を考えたい。



第38図D区 遺構全体図 (1/160)



第39図 D区 出土遺物実測図 (1/4)

9. D区の調査 (遺物)

124～127はD区の出土遺物である。

124～126はSX004の出土遺物である。124は壺の口縁部で、復元口径16.0cmを測る。125は壺の頸部～肩部の資料である。頸部に断面三角形の突帯が巡り、刻み目をもつ縦方向の浮文が付く。126は甕の底部である。やや上げ底風のもので、底径6.0cmを測る。

127はSX001の出土遺物である。底部糸切り離しの土師器坏で、復元底径8.2cmを測る。

調査区	報告番号	出土遺構	種別	器種	口径	器高	底径	備 考	年 代	産地
B	91	SD001	陶器	甕	(35.4)			乗岡編年中世6期	16世紀	備前
B	92	SD001	白磁	碗	(17.6)			太宰府分類V類	12世紀	中国
B	93	SD001	須恵器	坏蓋	(10.0)				7世紀中頃	
B	94	SD001	土師器	甕				取っ手	9世紀	
B	95	検出時	染付	碗	(10.2)			くらわんか手	1680～1740	肥前
B	96	検出時	弥生土器	甕			8.8		弥生時代中期	
B	97	検出時	縄文土器	深鉢				刻み目突帯	晩期末（弥生早期）	
B	98	検出時	縄文土器	深鉢						
B	99	検出時	陶器	播鉢			(12.8)		17世紀後半	肥前
B	100	検出時	弥生土器	壺	(16.0)			複合口縁 櫛描波状文	弥生時代後期	
B	101	検出時	縄文土器	深鉢				刻み目突帯	晩期末（弥生早期）	
B	102	検出時	縄文土器	深鉢					晩期末（弥生早期）	
B	103	検出時	縄文土器	深鉢	(49.0)			刻み目突帯	晩期末（弥生早期）	
B	104	検出時	縄文土器	深鉢	(39.4)			刻み目突帯	晩期末（弥生早期）	
C	105	SX005		フイゴ羽口				土製 内径4.2cm		
C	106	SX006	土師器	坏			(10.0)	底部糸切り離し	14世紀後半～	
C	107	SX008	土師器	高台付坏						
C	108	SX008	土師器	坏蓋	(11.0)				7世紀後半	
C	109	SX008	土師器	坏	(20.0)			手持ちヘラ削り	7世紀後半	
C	110	SX008	土師器	坏	(21.4)			手持ちヘラ削り	7世紀後半	
C	111	SX008	弥生土器	甕	(26.6)			跳ね上げ口縁・頸部に三角突帯	弥生時代中期後葉	
C	112	SX008	弥生土器	壺	(18.4)			鋤先状口縁部	弥生時代中期後葉	
C	113	SX008	弥生土器	甕			(6.0)	やや上げ底	弥生時代中期後葉	
C	114	SX008	弥生土器	甕			6.7	やや上げ底	弥生時代中期後葉	
C	115	SX008	弥生土器	甕			(6.2)	平底	弥生時代中期後葉	
C	116	SX008	弥生土器	甕			6.2	やや上げ底	弥生時代中期後葉	
C	117	SX008	弥生土器	甕			(5.0)	平底	弥生時代中期後葉	
C	118	SX008	縄文土器							
C	119	SX009	弥生土器	甕				口縁部下突帯	弥生時代中期後葉	
C	120	SX009	弥生土器	甕	(27.0)			跳ね上げ口縁	弥生時代中期後葉	
C	121	SX009	弥生土器	甕			(6.6)	やや上げ底風	弥生時代中期後葉	
C	122	SX008	石	石錘				凝灰岩製3ヶ所に凹み		
C	123	SX008	石	石錘				凝灰岩製2ヶ所に凹み		
D	124	SX004	弥生土器	壺	(16.0)				弥生時代中期後葉	
D	125	SX004	弥生土器	壺				三角突帯 浮文	弥生時代中期後葉	
D	126	SX004	弥生土器	甕			(6.0)	やや上げ底風	弥生時代中期後葉	
D	127	SX001	土師器	坏			(8.2)	底部糸切り離し	14世紀後半～	

表3 B区・C区・D区出土遺物観察表

## IV 自然科学的調査

### 1. 玉沢条里遺跡第15次調査区A・B・C区の植物珪酸体分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

#### はじめに

玉沢地区条里跡は大分市南西部に位置し、大分川支流の七瀬川と周辺の独立丘陵に囲まれた沖積低地に立地する。これまで実施された周辺の発掘調査では、古代や中世とされる水田層で植物珪酸体分析が実施され、すくなくとも弥生時代以降に稲作が行われ、中世以降に水田域が拡大したことが推定されている。今回は、第15次調査区における稲作の消長に関する情報を得る目的で、植物珪酸体分析を実施した。

#### 1. 試料

試料はA区、B区、C区から採取された土壌試料15点である。A区は中央ベルトの3層(水田2)、5層(水田3)、6層(水田4)、11層(水田5)、15層(水田6)、19層(水田7)、22層(水田8)の各層から採取された土壌試料7点である。B区は、北壁の11層、12層、13層の各層から採取された土壌試料3点である。C区は、東壁の1層、2層、3層、4層、5層の各層から採取された土壌試料5点である。

#### 2. 分析方法

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤(2004)の分類に基づいて同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量(同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算)を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。この際、100個体以下は「<100」で表示し、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている(100単位にする)。また、各種類の植物珪酸体含量とその層位的変化から稲作の様態や古植生について検討するために、植物珪酸体含量の層位的変化を図示する。

#### 3. 結果

結果を表1、図1に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。以下に、各区の産状を述べる。

##### ・A区

中央ベルトで調査した各水田層(発掘調査所見による)では、植物珪酸体含量が約4万個/g-約8万個/gの範囲で増減を繰り返しながら、上位に向かって増加する傾向が見られる。各水田試料では栽培植物であるイネ属が検出され、葉部の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が認められる。その含量は、短細胞珪酸体が200-1,600個/g、機動細胞珪酸体が200-3,000個/gの範囲で層位的に増減を繰り返すが、上位に向かって増加する傾向が見られる。水田2(3層)では、短細胞珪酸体が5,100個/g、機動細胞珪酸体が5,700個/gになる。

また、水田2ではオオムギ族の短細胞珪酸体も検出される。この他、ネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科なども認められる。水田8(22層)-水田6(15層)ではヨシ属の産出が目立ち、増加する傾向が見られる。しかし、水田5(11層)-水田2にかけてはヨシ属が減少し、ネザサ節を含むタケ亜科がわずかに増加する。イネ科の他に、樹木起源珪酸体の第Ⅲグループや第Ⅳグループ(近藤・ピアスン,1981)も検出される。

#### ・B区

北壁の13層と12層の植物珪酸体含量は同様であり、5,000個/g程度である。11層の植物珪酸体含量は、下位の土層よりも少なく、約2,500個/gである。いずれの土層からも、イネ属が検出されるものの、その含量はいずれも100個/g未満である。この他に、ネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科、樹木起源珪酸体なども認められる。

#### ・C区

東壁では、5層から1層にかけて植物珪酸体含量が増加する傾向が見られる。イネ属は4層から上位で連続的に検出される。その含量は、層位的に増加する傾向が見られる。短細胞珪酸体は100個/g未満-2,200個/g、機動細胞珪酸体は100個/g未満-4,000個/g程度の範囲で増加する。この他に、ネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科、樹木起源珪酸体なども認められる。

## 4. 考察

A区中央ベルトで調査した各水田では、概して増加傾向が見られ、水田2(3層)では、短細胞珪酸体が5,100個/g、機動細胞珪酸体が5,700個/gに達する。稲作が行われた水田跡の土壌では、イネ属の機動細胞珪酸体が5,000個/g程度検出されることが多いとされている(杉山,2000)。しかし、これまで実施した調査区でのイネ属の含量には大きなバラツキが見られ、水田耕作土とされていても、必ずしもこの値を上回ってはいない。例えば、今回の東方に位置する第7次調査区4トレンチ北壁断面で見られた水田8-水田3の水田層では、最も多い含量で短細胞珪酸体が約6,000個/g、機動細胞珪酸体が約3万個/g、最も少ない含量で短細胞珪酸体が100個/g未満、機動細胞珪酸体が約1,000個/gである。また、北方に位置する第18次調査区西壁では、最も多い含量で短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体がそれぞれ約2,000個/g、最も少ない含量で短細胞珪酸体が800個/g、機動細胞珪酸体が約500個/gであった。このようなばらつきは各地で報告されており、耕作期間や堆積速度、稲作の生産性の違いなどが理由としてあげられている(古環境研究所,1999など)。

以上を考慮して今回の植物珪酸体分析の産出状況をみると、水田8-水田2において稲作が行われた可能性があり、考古学的所見を裏付けると言える。なお、水田2ではオオムギ族の植物珪酸体が検出されることから、ムギ栽培の可能性もあるが、植物珪酸体の形状のみでは、栽培種と近縁の野生種を区別できないので、断定はできない。

B区北壁の13層、12層、11層ではイネ属が検出されたものの、その含量はわずかであった。植物珪酸体の粒径は「シルト」であり、分析を実施した各層の粒径組成から考えて、植物珪酸体が蓄積しにくかったとは考えにくく、風化により消失した可能性がある。植物珪酸体は、アルカリ性を示す水域や、乾湿を繰り返すような場所においては、風化が進み保存が悪くなる傾向がある(江口,1994,1996など)ことから、当時乾湿を繰り返すような環境下であった可能性がある。B区では、植物珪酸体が風化によって一部消失し、多産する種類や、風化に強い種類が残ったと思われる。イネ属が検出されることから、遺跡内もしくは周辺で稲作が行われていた可能もあるが、組成が歪曲している可能性が大きく、詳細は不明である。

C区東壁では、4層より上位でイネ属が連続的に検出された。その含量は、層位的に増加する傾向が見られた。前述した周辺調査区での調査例を考慮すれば、4層から上位の層準で稲作が連続的に行われた可能性が考えられ

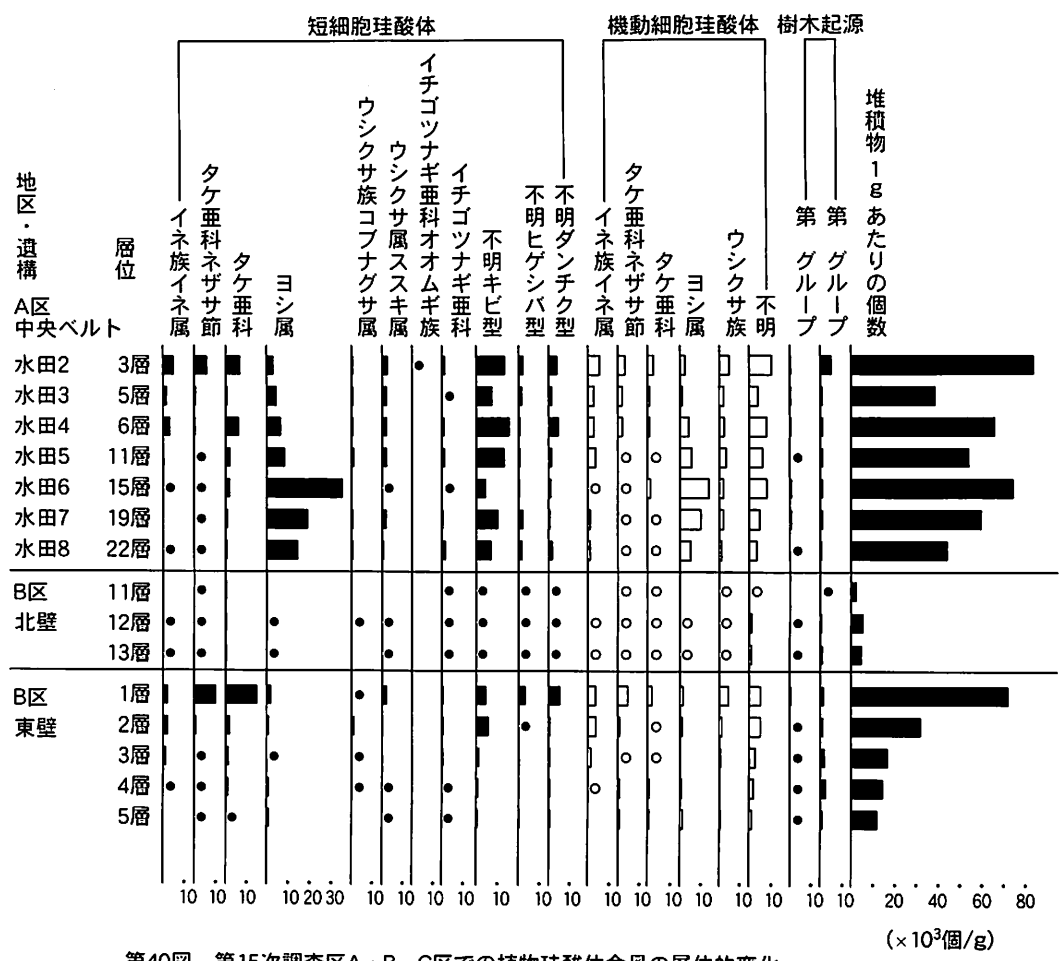
る。

これまでの周辺調査区での自然科学分析調査により、第7次調査区では弥生時代前期以降、第8次調査区（病院建設地）では古代あるいは近世に稲作の可能性が指摘されている。さらに第7次調査区では、古墳時代のヒエやムギ類の栽培の可能性も示唆されている。また西側に位置する第4次調査区では、中世以降の堆積物でイネ属のプラント・オパール（植物珪酸体）が検出され、稲作の可能性が指摘されている（佐々木,2004）。北東方の二反田地区では、イネ属のプラント・オパールの産状から、弥生時代-古墳時代に小規模な水田稲作が存在し、近世になって全面的に水田化された可能性が指摘されている（佐々木,1999）。今後玉沢条里遺跡における稲作の消長や空間的な分布については、今回の調査結果を含め、層序対比や年代観の検討を加えて総合的に行われることが望まれる。

一方イネ属以外の組成は、含量は異なるがA区、B区、C区とも類似し、前報とも調和的である。植物珪酸体組成から、調査区内ではネザサ節、ヨシ属、コブナグサ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科などのイネ科植物が生育していたと思われる。またA区の水田8-水田6にかけてはヨシ属の産出が目立ったことから、ヨシ属が繁茂していたことがうかがえる。ただし、上位層でヨシ属が減少する傾向も見られ、後代に離水が進んだ可能性も考えられる。一方、樹木由来の珪酸体である第Ⅲグループや第Ⅳグループ（近藤・ピアスン,1981）が検出される。九州・沖縄地方では樹木起源珪酸体の第Ⅲグループが、表層あるいは埋没土壤中に特徴的に認められるが、その給源としてイスノキが想定されている（近藤,1976）。国分市の上野原遺跡では、1.1万年以降、樹木珪酸体が増加傾向を示し、気候温暖化に伴い周辺域に照葉樹林が拡大したことが推測されている（杉山,1999）。今後、イネ属の動態と同様に連続的な分析を行い、樹木珪酸体の変遷を把握することを通して、古植生変遷について明らかにできるものと期待される。

#### 引用文献

- 江口 誠一,1994,沿岸域における植物珪酸体の分布 千葉県小櫃川河口域を例にして,植生誌研究,2,19-27.
- 江口 誠一,1996,沿岸域における植物珪酸体の風化と堆積物のpH値,ペドロジスト,40,81-84
- 近藤 鍊三,1976,樹木起源の珪酸体について,ペドロジスト,20,176-189.
- 近藤 鍊三,2004,植物ケイ酸体研究,ペドロジスト,48,46-64.
- 近藤 鍊三・ピアスン 友子,1981,樹木葉のケイ酸体に関する研究(第2報)双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について,帯広畜産大学研究報告,12, 217-229.
- 佐々木 章,1999,プラント・オパール分析結果から見た二反田地区の水田開発,「玉沢地区条里跡遺跡群 九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書」,大分県教育委員会,105-108.
- 佐々木 章,2004,玉沢条里遺跡土壌のプラント・オパール分析結果から見た水田開発史,「大分県文化財調査報告書第168輯 玉沢地区条里跡 国道442号道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」,大分県教育委員会,21-23.
- 杉山 真二,1999,植物珪酸体分析からみた最終氷期の九州南部における照葉樹林発達史,第四紀研究,38,109-124.
- 杉山 真二,2000,植物珪酸体(プラント・オパール),辻 誠一郎編著 考古学と自然科学3 考古学と植物学,同成社,189-213.

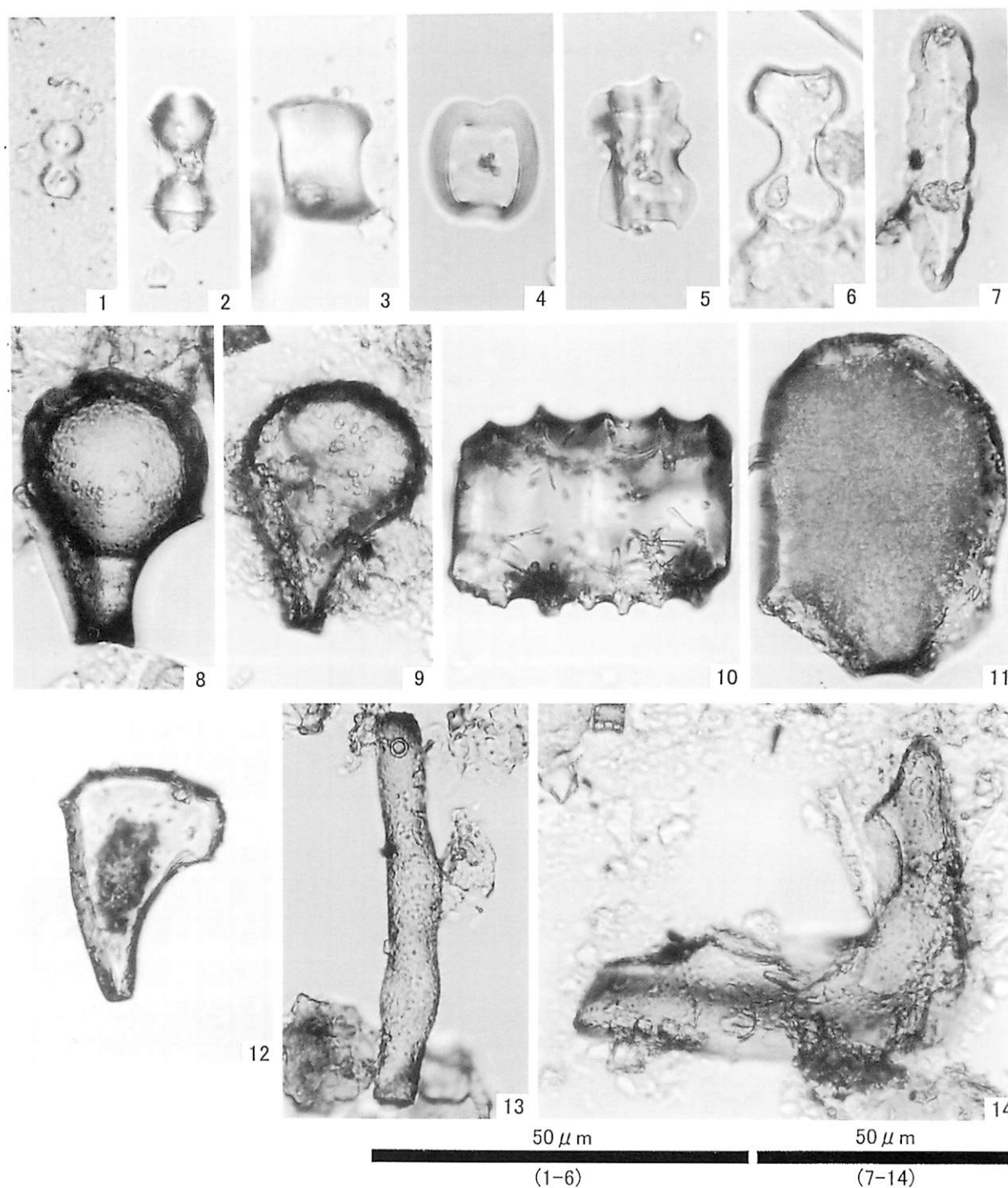


第40図 第15次調査区A・B・C区での植物珪酸体含量の層位的変化  
堆積物 1gあたりに換算した個数を示す。●○は500個/g未満の種類を示す。

(個/g)

種 類	A区中央ベルト								B区北壁			C区東壁				
	水Ⅲ2	水Ⅲ3	水Ⅲ4	水Ⅲ5	水Ⅲ6	水Ⅲ7	水Ⅲ8		11層	12層	13層	1層	2層	3層	4層	5層
試料番号	3層	5層	6層	11層	15層	19層	22層									
イネ科葉部短細胞珪酸体																
イネ族イネ属	5,100	1,600	3,300	600	500	700	200	-	<100	<100	<100	2,200	2,100	1,100	<100	-
タケ亜科ネササ節	6,100	900	600	200	200	200	100	<100	400	400	200	10,300	1,000	400	200	400
タケ亜科	6,900	1,100	6,200	2,500	2,200	1,100	1,000	800	600	800	800	14,900	2,200	1,400	1,200	500
ヨシ属	3,400	4,700	6,800	8,500	35,100	19,100	14,400	-	200	200	200	2,100	1,100	500	1,400	800
ウシクサ族コナグサ属	800	600	800	1,200	-	900	1,100	-	<100	-	-	200	1,600	400	<100	-
ウシクサ族ススキ属	3,000	2,500	2,500	2,500	500	2,400	900	-	<100	200	200	2,600	800	600	200	300
イチゴツナギ亜科オオムギ族	400	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イチゴツナギ亜科	1,800	400	1,200	1,400	500	600	2,100	100	<100	<100	<100	900	1,000	600	400	300
不明キビ型	13,400	7,600	15,600	13,500	4,800	10,200	7,400	200	300	300	300	5,000	6,100	1,700	1,200	800
不明ヒゲシバ型	2,600	2,000	1,000	1,000	700	2,200	2,000	200	100	100	100	3,800	500	800	700	700
不明ダンシク型	4,500	1,700	4,900	1,700	1,500	900	1,800	300	200	300	300	5,700	1,100	800	700	800
イネ科葉身機動細胞珪酸体																
イネ族イネ属	5,700	3,000	2,700	3,700	200	1,300	800	-	<100	<100	<100	3,700	4,100	1,800	<100	-
タケ亜科ネササ節	3,400	1,900	1,800	400	500	400	300	<100	500	200	200	4,900	600	500	1,100	1,100
タケ亜科	2,600	700	1,200	400	1,000	200	100	100	200	300	300	1,700	300	300	600	600
ヨシ属	2,800	1,400	4,700	6,000	14,000	10,200	5,300	-	400	200	200	2,000	1,400	500	1,000	2,000
ウシクサ族	5,100	2,400	2,700	3,500	2,200	2,200	1,600	100	300	200	200	4,800	1,400	900	500	700
不明	10,500	4,100	8,000	6,000	8,200	4,800	3,800	400	1,000	700	5,100	5,300	2,800	1,900	1,200	
樹木起源																
第Ⅰグループ	600	600	800	400	1,200	1,100	400	-	<100	<100	<100	600	300	200	300	<100
第Ⅱグループ	5,300	1,000	1,400	1,200	1,000	1,100	900	200	900	1,200	1,800	1,400	1,900	3,000	1,800	
合 計																
イネ科葉部短細胞珪酸体	48,000	23,200	42,900	33,100	46,000	38,300	31,000	1,600	2,100	2,100	47,700	17,200	8,200	6,100	4,600	
イネ科葉身機動細胞珪酸体	30,000	13,500	21,100	19,900	26,200	19,100	11,900	700	2,500	1,700	22,200	13,100	6,700	5,200	5,500	
樹木起源	5,900	1,600	2,100	1,500	2,200	2,200	1,300	200	1,000	1,300	2,400	1,700	2,000	3,300	1,900	
総 計	83,900	38,300	66,100	54,600	74,300	59,600	44,200	2,500	5,600	5,200	72,400	32,000	17,000	14,500	11,900	

表4 第15次調査区A・B・C区の植物珪酸体含量



1. イネ属短細胞珪酸体(A区中央ベルト 水田4;6層)
2. イネ属短細胞珪酸体(A区中央ベルト 水田7;19層)
3. ネザサ節短細胞珪酸体(A区中央ベルト 水田2;3層)
4. ヨシ属短細胞珪酸体(A区中央ベルト 水田8;22層)
5. コブナグサ属短細胞珪酸体(A区中央ベルト 水田8;22層)
6. ススキ属短細胞珪酸体(A区中央ベルト 水田8;22層)
7. オオムギ族短細胞珪酸体(A区中央ベルト 水田2;3層)
8. イネ属機動細胞珪酸体(A区中央ベルト 水田8;22層)
9. イネ属機動細胞珪酸体(C区東壁;3層)
10. ネザサ節機動細胞珪酸体(A区中央ベルト 水田2;3層)
11. ヨシ属機動細胞珪酸体(A区中央ベルト 水田8;22層)
12. ウシクサ族機動細胞珪酸体(A区中央ベルト 水田8;22層)
13. 樹木起源第Ⅲグループ(A区中央ベルト 水田2;3層)
14. 樹木起源第Ⅳグループ(B区北壁;13層)

第41図 植物珪酸体



## V まとめ

玉沢地区条里第15次調査は、現在の市集落が乗った微高地の北端部を東西に横断する形で行われた。調査の結果、微高地を境に北西部と南東部で水田の様相の違いが確認された。そこで以下、この調査成果を受ける形で、

1. 周辺埋没微地形の復元、
2. 条里状地割りの形成時期に関する検討を行いまとめに変えたい。

### 1. 周辺埋没地形の復元

今回の調査及びこれに先だて行われた試掘調査、隣接調査区の発掘調査の成果から復元された周辺埋没地形は、第42図のとおりである。

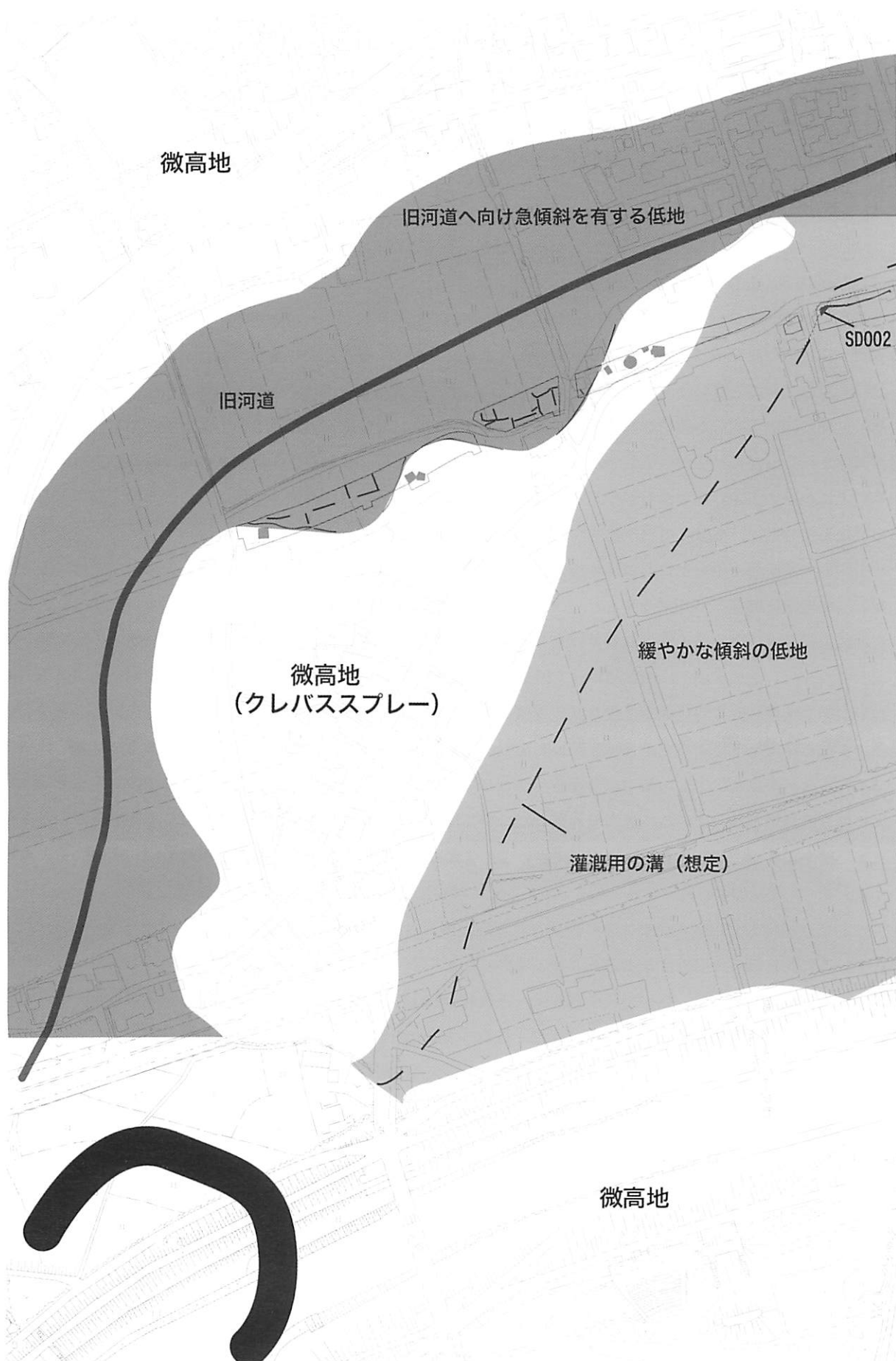
現在の市集落を中心とした地域では、住居跡等生活関連遺構が確認される微高地が確認されている。七瀬川が大きく蛇行する屈曲部にその端を発し、南西から北東部に向けて延びるこの微高地は、その北側先端部で低地部分に向け急な傾斜を有した入り江状に入り組んだ状況が、その南側先端部で低地との境が明瞭でない緩やかな傾斜で低地に向かう状況が確認されている。この微高地の北側には、旧河道及びこの旧河道を利用した水路の存在が確認される低湿地が広がっており、この低地を挟んだ北側には、住居跡等生活関連遺構が確認された宗方から木の上にかけての独立丘陵から派生する微高地が存在している。この微高地の南側には、前述した緩やかな傾斜の低地を挟む形で、やはり植田市遺跡<sup>注1</sup>が営まれた微高地が存在する。

玉沢地区条里跡を中心とした古環境復元分析については、立命館大学高橋学氏による「大分川・七瀬川流域平野の地形環境分析-玉沢条里跡を中心に-」においてその詳細分析がなされている。この分析において氏は、この玉沢地区一帯を完新世段丘Ⅰ面と完新世段丘Ⅱ面に分類している。完新世段丘Ⅰ面は弥生時代前期末の河床低下によって段丘化した地形面で、縄文後期から晩期にかけて形成された中州や自然堤防などの微高地や旧河道等の微地形が縄文晩期～弥生時代前期に後背湿地堆積物により埋没している。完新世段丘Ⅱ面は、古代後半から中世初頭の更なる河床低下によって段丘化した地形面で、完新世段丘Ⅰ面の段丘崖下となる部分である。弥生時代中期前半～古代前半にかけて旧中州や自然堤防、クレバースプレー等の微高地が形成され、その後後背湿地堆積物により埋没微地形となっている。その境界部分についてはこれら後背湿地堆積物の堆積により不明瞭なものとなっているが、現在の市集落の北東から南西にかけてわずかな痕跡を残しており、それを境にその北側を完新世段丘Ⅰ面、その南側を完新世段丘Ⅱ面としている。尚その境界は、当地に認められる埋没旧河道と重なるとしている。

ここで、前段の発掘調査成果により復元された埋没地形と高橋氏による古環境復元分析との整合作業を行う。氏のいう完新世段丘Ⅰ面と完新世段丘Ⅱ面の境界に存在する旧河道は、旧河道及びこの旧河道を利用した水路という形で確認されており、弥生時代中期前半～古代前半にかけて旧中州や自然堤防、クレバースプレー等の微高地については、住居跡等生活関連遺構が確認される市集落を中心とした微高地、植田市遺跡が営まれた微高地に相当するものと考えられ、氏の分析した古環境復元の結果と齟齬はないものとなった。

特に市集落を中心とした微高地の北側先端部に見られる入り江状に入り組んだ状況については、河川の破堤地点に形成されたクレバスから掌状に広がる平面形をなす、曲流した河川の外側に河川氾濫時に形成されるクレバースプレーの特徴の典型的な形ということになり、氏の分析時の指摘どおりの結果となった。このクレバースプレーの形成時期について氏は、弥生時代中期前半～古代前半にかけて形成されたものであるとしながらも、規模が大きく比高もあることから1回の河川の氾濫で形成されたものではなく、数回以上多期にわたる氾濫堆積物の集合体である可能性を指摘し、今後の発掘調査の成果にその結論を委ねている。そこで発掘調査の所見であるが、B区で出土した縄文晩期終末(弥生早期)に位置づけられる遺物群の存在を始めとして他の調査区からも当該時期遺物が散見される状況から推測して、この微高地が完新世段丘Ⅰ面形成時から完新世段丘Ⅱ面形成時を股にかけ

る形で形成された大規模なものであった可能性が考えられるという結果となった。



第42図 周辺埋没地形復元図

今後、この高橋氏の分析と発掘成果の整合作業を、今回の調査区だけではなくこれまで行われた調査成果及び今後行われるであろう周辺地域の発掘調査の成果にその範囲を広げ、玉沢地区全体における埋没微地形の復元作業を行いたい。

## 2. 条里状地割りの形成時期について

条里状地割りの形成時期について、これまでの玉沢地区における水田調査の成果<sup>122</sup>をまとめると、溝や畦畔等が検出された水田の方向性は、Ⅰ 自然地形の制約による不定形なもの、Ⅱ 現在当該地区に残るN-13°-W及びこれに類する方向性をもつものの大きく2つのパターンに分類され、特にⅡ類の水田の時期については、①古墳時代に遡るもの、②古代に遡るもの、③中世に遡るものの概ね3つのパターンに分類されるようである。

今回の調査区に限った場合は、A区で検出された水田(SX020)に関しては、条里状地割りの方向性よりはむしろ地形の制約を受ける形の水田で、C区で確認された水田(SX001・005・008)及び溝(SD002・009)については、第43図の変遷図にみるように、地形的な制約を優先するⅠ類からⅡ類に変遷する状況が確認されている。Ⅱ類の成立時期については、中世後半期に位置づけられる③のパターンになると考えられる。

ここで再び高橋氏の古環境復元分析の成果を紐解くと、完新世段丘Ⅰ面及びⅡ面における水田形成について、微起伏に富んだ段階であれば、微地形に影響されて不定形の小区画水田しか拓くことが出来ないが、これらの微地形が洪水や後背湿地堆積物により埋積され土地が平坦になった段階であれば、多大な労力を用いずにその整地作業が可能であるとしている。即ち、①古墳時代に遡るもの、②古代に遡るもの、③中世に遡るもの、の3パターンに分類された条里状地割りを指向する水田の成立時期は、微地形が洪水や後背湿地堆積物により埋積され土地が平坦になった段階の違いであると推測されるのである。現在までの発掘調査の成果によるとこれら当地に残された条里状地割りを指向する水田の平面的な広がりを観察すると、古い位置づけとなる①及び②のパターンについては、広範に広がるものではなく、むしろ③のパターンが広範に広がる傾向が指摘される。

特に今回の15次調査区の成果から③のパターンを以下に検証した。C区のSD002及び009とした溝跡については、高橋氏の指摘する古代後半から中世初頭の更なる河床低下によって段丘化した完新世段丘Ⅱ面へ水を供給する灌漑用の水路であると考えられ、微高地の縁に沿う形で延びている。一方中世後半期の灌漑用の水路については、その条里状地割りの方向性を指向する畦畔から推定して、B区調査区で確認された溝跡SD001及びそれを踏襲してつくられた本調査区の北側を南北方向流れる現水路の位置及び方向が想定され、前述の水路とは別に新しい区画成立に際し新設された水路であると考えられる。

中世前半期に既に存在する地形に制約された大規模な灌漑施設の水田から、条里状地割りを指向する水田への改変については、その範囲が広範に及びものであることに加え、新たな灌漑システムの構築を伴うことから、前述の微地形が洪水や後背湿地堆積物により埋積され土地が平坦になった段階の違いだけでは説明できない部分もでてくる。それ故③のパターンについては、今後中世後半期の当該地区における政治的な動向もふまえた上で、その変遷の背景を考える必要がでてきたといえよう。

最後に①②のパターンについて、①についてはより局所的な広がりにしかならない。②については、①と比べるとより広範に広がることが推定されるが玉沢地区条里一帯に広がりをみせる状況ではないことから、前述の高橋氏という土地が平坦になった段階の違いに当てはまりそうな状況であるといえよう。ただし、その広がりがどのくらいのもので、その状況をして「条里」とするか否かについては未だ検討されていない上、③のパターンにおいても、後世の削平により古い段階の水田の存在及びその平面的な広がりが確認できていない可能性も考えられることから、今後の周辺遺跡の調査成果もふまえ、その評価については慎重に行われなければならない。

## 参考文献

高橋 学 (2005)「大分川・七瀬川流域平野の地形環境分析－玉沢条里跡を中心に－」

『玉沢地区条里跡 第8次発掘調査報告』大分市教育委員会

注1 吉田 寛(1994)『植田市遺跡』大分県教育委員会

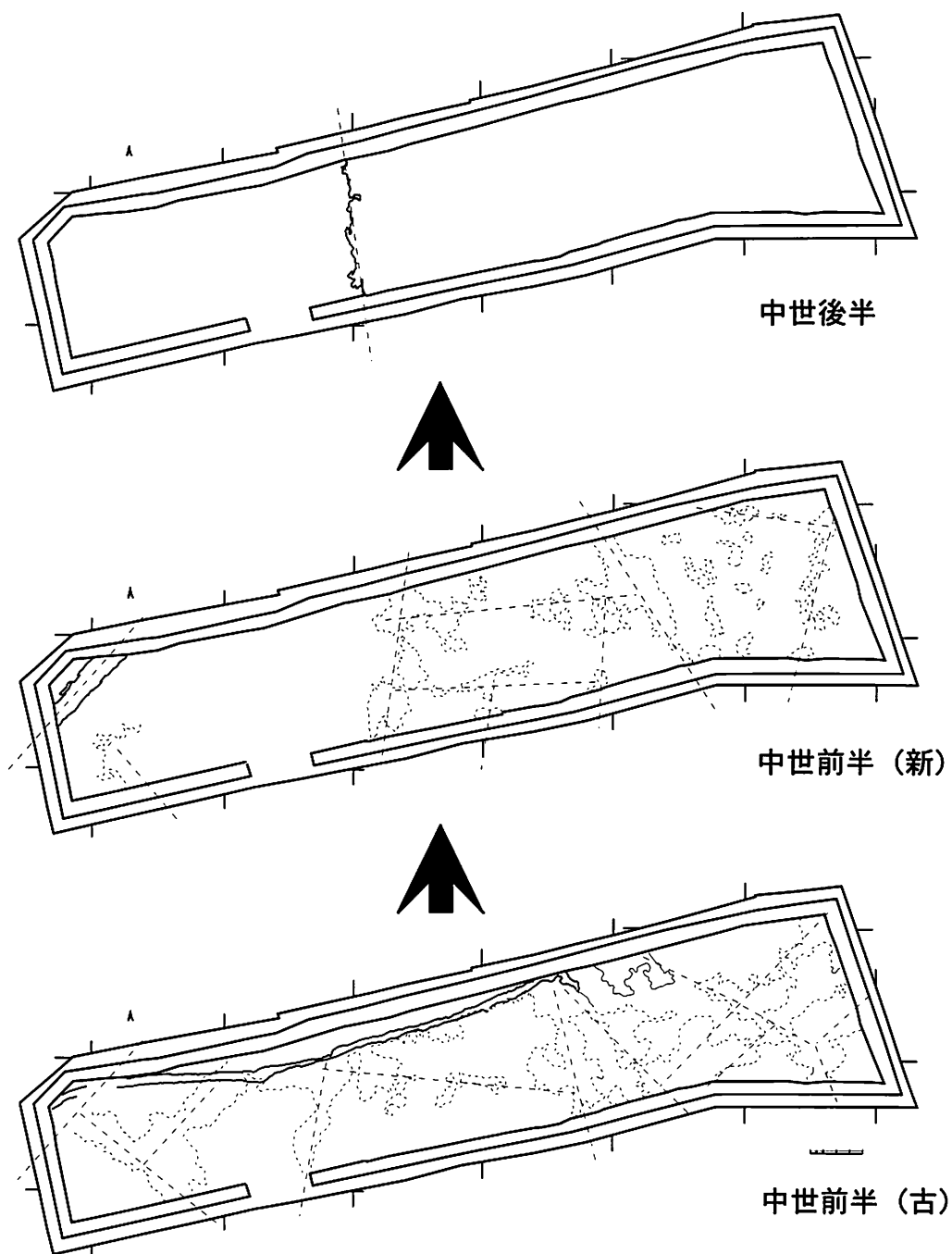
注2 荻 幸二(2005)『玉沢地区条里跡 第2次発掘調査報告書』大分市教育委員会

佐藤孝則・井口あけみ(2003)『玉沢地区条里跡 第6次発掘調査報告』大分市教育委員会

佐藤孝則・井口あけみ(2005)『玉沢地区条里跡 第8次発掘調査報告』大分市教育委員会

佐藤孝則・井口あけみ(2005)『玉沢地区条里跡 第3次発掘調査報告』大分市教育委員会

佐藤孝則・井口あけみ(2006)『玉沢地区条里跡 第7次発掘調査報告』大分市教育委員会



第43図 C区 水田区画変遷図

## 写真図版



玉沢地区条里跡第15次調査発掘作業風景



1. A区 調査区全景



1. B区 調査区全景



1. D区 調査区全景



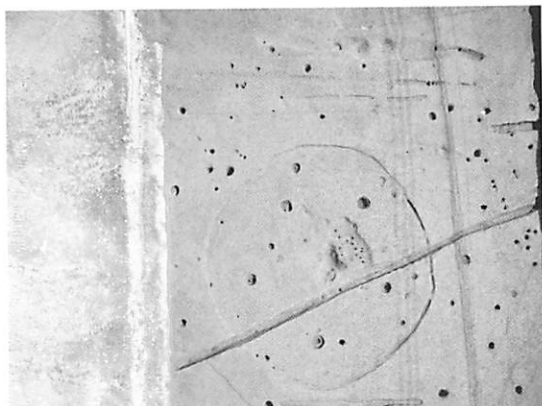
1. C区 調査区全景 1



2. C区 調査区全景 2



写真図版 3



1. A区SH003 全景



2. A区SB001 全景



3. A区SX020 (水田1) 全景



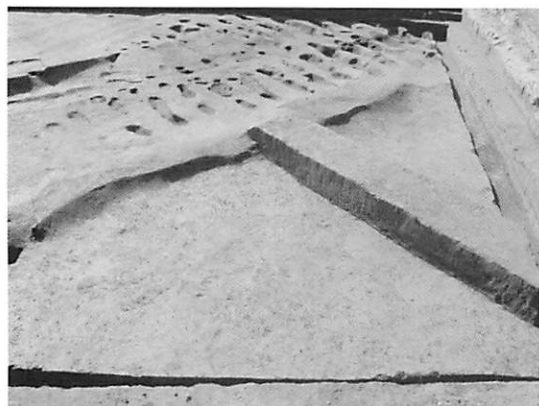
4. A区SX020 (水田2) 全景



5. A区SF021 全景



6. A区SF022 全景



7. A区SX020 (水田4) 全景



8. A区SD010 全景





1. A区SX020 (水田5) 全景



2. A区SX020 (水田6) 全景



3. A区SX020 (水田7) 全景



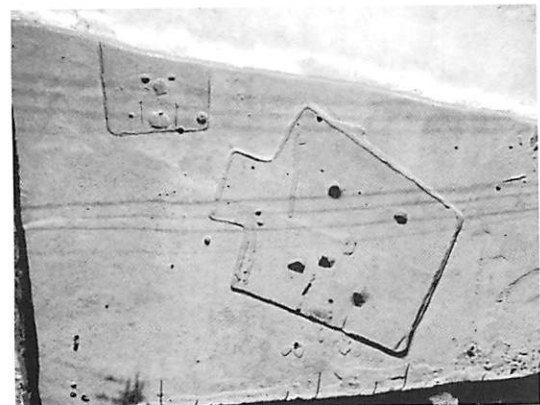
4. A区SX020 (水田8) 北側近景



5. A区SX020 (水田8) 南側近景



6. A区SX020 (水田8) 内土抗全景



7. B区SH005・013全景



8. B区SH013 全景

写真図版 5



1. B区SH005 全景



2. B区SH005 遺物出土状況 1



3. B区SH005 遺物出土状況 2



4. B区SX014・016 全景



5. D区SX001・002・003 全景



6. D区SX004 全景



7. C区SX001、SX005 西半



8. C区SX005 東半



1. C区SD002 全景



2. C区SD002 土層断面図



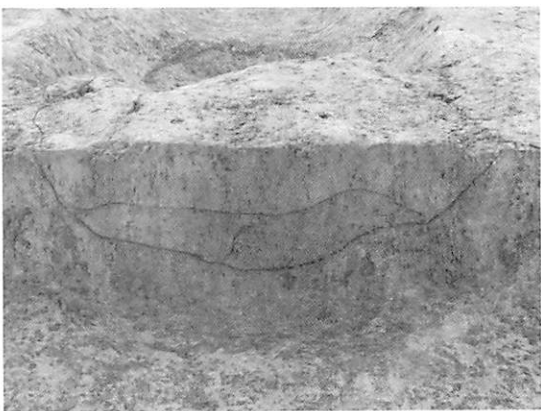
3. C区SX008 西半



4. C区SX008 東半



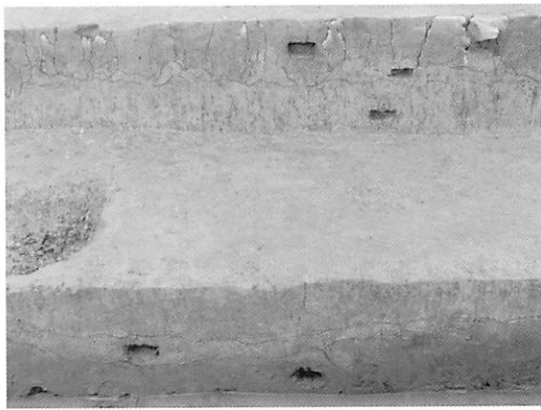
5. C区大畦畔土層断面図



6. C区SD009 土層断面図



7. C区SD009 全景



8. C区調査区東壁土層断面図

写真図版 7



1. A区 SH003-1



2. A区 SX020-9



3. A区 SX020-20



4. A区 SX020-22



5. A区 SX020-30



6. A区 SX020-34



7. A区 SX020-35



8. A区 SX020-440





1. A区 検出時-42



2. A区 検出時-45



3. B区 SH005-60



4. B区 SH005-61



5. C区 SX006-106



6. C区 SX008-110



7. C区 SX008-116



8. D区 SX004-125

報 告 書 抄 録

ふりがな	たまさわちくじょうりあと だい15じはっくつちようさほうこく							
書名	玉沢地区条里跡 第15次発掘調査報告							
副書名	市玉沢線道路建設に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	大分市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第71集							
編著者名	河野史郎							
編集機関名	大分市教育委員会							
所在地	〒870-0046 大分市荷揚町2番31号 TEL (097) 534-6111							
発行年月日	2007年3月30日							
ふりがな	ふりがな	コ ー ド						
所収遺跡名	所在地	市 町 村	遺跡番号	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
たまさわちく 玉沢地区 じょうりあと 条里跡 だい15じちょうさ 第15次調査 ほうこく 報告	おおいたけん 大分県 おおいたし 大分市 おおあざいち 大字市 あざ おおつば 字 大坪 いちばんいちごう 1 番 1 号 ほか じゅうはちひつ 外 18筆	4 4 2 0 1	3 2 2 1 1 1	33° 11' 05"	131° 34' 40"	H17.9.1 ～ H18.3.30	2,800㎡	道路建設
所収遺跡名		種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
玉沢地区条里跡		条 里 状 地 割 他	古 墳 中 世	水 田 住 居 跡	土 師 器	古墳時代の住居空間 と水田遺構の確認  中世前半期の地形に 制約された水田区画 から、中世後半期の 条里状地割にあった 水田区画への変遷を 確認		

大分市埋蔵文化財調査報告書 第71集  
**玉沢地区条里跡 第15次発掘調査報告書**  
—市玉沢線道路工事に伴う発掘調査報告書—

平成19年 3月

発行 大分市教育委員会  
印刷 (有)印刷 良 栄 堂